

Fate/Nilotpalagita Synopsis 【改訂版】

時雨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、某プロジェクトの如く事故に遭い死んでしまった女子高生は気がつくと赤子になっていた。自分が転生したことに気づいた彼女は愕然とするが、事実を受け入れて生きていこうとする。

しかし、あらゆる困難に見舞われる彼女。見知らぬ森で途方に暮れていると、とある人物と逢う。

それがきっかけで、彼女は運命と邂逅する。彼女は自分に降りかかる困難に打ち勝つことができるのだろうか？

—— そんな彼女の人生のお話。

初めてまして。時雨と申します。

二次小説を書くのは今回がはじめてです。

誤字・脱字がありましたら、是非報告をして下さい。

読者の皆様に楽しんでいただけたら幸いです。

ご意見、ご感想、お待ちしています。

ちなみに、更新は気まぐれです。のんびりと待っていてくれると嬉しいです。

※なお、作者の心は豆腐メンタルです。批判のコメントなどを書き込む場合はお手柔らかにお願いします……。アンチ・ヘイトタグは念のためです。

※チマチマと話を手直ししているところもあるので、あしからず。

・お知らせ

物語を構成し直す為、最初から順に投稿します。

加筆修正しているので、違和感があるかもしれません。旧バージョンは暫くしたら削除します。

目

次

序章

現の夢

1

1章 ある日、森の昼下がりにて

湖の畔

5

見知らぬ天井

8

斧を持った男と少女

12

2章 両雄との邂逅

数年後、ある日の会話

18

波乱の競技会

21

不屈と太陽

27

雷帝と正法子

34

3章 王家の華

34

カリ・ユガの陰謀

44

嵐前の静けさ

47

絢爛なる花婿選び

53

絢爛なる花婿選び

58

絢爛なる花婿選び

65

下

中

上

序章 現の夢

腥風が吹き荒れ、多くの命が散り逝く戦場に、彼女はいた。
イレギュラー

多くの敵を相手にしながら広い戦場を駆け抜けた為か、その身に纏う灰色の外套は血に染まつており、やつとのことで片刃刀タルワールを構えているその姿は、満身創痍であつた。

しかし、それでも、彼女は己の友人が対峙するはずだつた敵の前に立ちはだかり、懸命に片刃刀を振るつていた。顔を隠す様に深く被つたフードの合間から覗く青の双眸は、相手を射殺さんばかりの鋭い目をしている。彼女と共に戦つていた戦士たちはというと、すでに敵の周りで息絶えており、渴いた土に多くの血を染み込ませていた。

「…………」

「どうした。攻撃を止めて……降伏でもするのか？」

ふと、動きを止めた彼女に対し、凶悪なその顔にニヤリと笑みを浮かべ、せせら笑うように男は問いかけた。彼自身も、満身創痍であつたが、構えている槍はしつかりと握られており、どことなく余裕を感じる。そんな男を見て、彼女はポツリと言葉を溢した。

「……今、ここで私が降伏したとしても、容赦なく君は私を殺すでしょう？・そうすれば、彼は進んで君に挑むだろうから」

「ツチ。なんだ、ばれていたか」

「君は分かりやすいからね。申し訳無いけれど、彼と君を戦わせる訳にはいかないんだよね。……だから、君と刺し違えてでも、私はこの場所で君を斃すたお」

凛とした声で彼女は男にそう答えた。それを聞いた男は言葉を返すこともなく、不意に槍を突き出した。心臓を狙う穂先を彼女は片刃刀で素早く反らし、勢いよく上に弾いた。男が僅かによろめく。その隙に彼女は男の懷に飛び込み、胴を切りつけた。

パッと赤の飛沫が宙を舞う。苦痛に顔を歪めた男だつたが、槍の柄を手の中で滑らせ、石突の上辺りを握るやいなや、横に振り抜いた。

視界の外から槍の石突が迫るのを感じて、首をひねる彼女だつたが、完全に避けることができず、急所であるこめかみの近くを石突に強打してしまつた。

衝撃で身体が吹き飛び、痛みで意識が遠のく。今がチャンスと言わんばかりに、男は瞬時に間合いを詰め、槍の穂先を彼女の心臓にめがけて突きだした。胸に吸い込まれる様に突きだされた穂先は、そのまま——。

「……ッ!!」

バツ、とそこで私は飛び起きた。

汗が額を伝うのを無視し、確認するように自分の左胸に手を当てる。あんな夢を見たせいか、心臓は狂ったように脈を打っていた。

「あ、起きたのね……って。ちょっと、大丈夫?」

心配そうな声が、正面から聞こえた。慌てて顔をあげるとそこには、いつもお世話をなつている保健室の先生が立つていた。一瞬、今見た夢のことを先生に聞いてもらおうかと考えたが、これ以上、迷惑をかけるわけにはいかないと思い直し、ゆっくりと首を縦に振る。

「……そういえば、先生。なんで、私は保健室にいるんですか」

「なんであつて、あなた。覚えてないの?」

ふと、思ったことを口にすると、先生は呆れたような顔をした。それを見て、私が、すみませんと言うと、先生は「別に謝らなくともいいわ」と優しく言葉を返してくれた。改めて私が保健室にいる理由を聞くと、先生は視線を反らし、少し言いづらそうに話し始めた。

先生曰く、私が廊下を歩いていたところ、たまたま教室の窓から飛んできたテニスボールが、勢いよく私のこめかみ近くに当たつたそうだ。それだけなら、まだよかつたのだが、連鎖するようにたまたま廊下を走つていた生徒が、私に気づかず、そのまま勢いよく激突したことによつて、私は気絶してしまい、それに気づいた担任によつて保健室に運ばれたから……だそうだ。

何を言つて いるのか分から ないつて? 大丈夫、私も分から ない。

それはともかく
閑話休題

その後、無事に保健室から解放された私は、一人寂しく商店街を歩

いていた。何故、私がここにいるのかというと、親に連絡を取つた際、不本意ながらも買い物を頼まれてしまつたからだ。

今日見た夢や、学校であつた事を考へると、今日は厄日なんだろうから、さつさと家に帰りたいと思つたが、仕方なくいつも寄つてゐるスーパーに向かう。

夕方ということもあり、周りには帰宅途中の学生やサラリーマン、私と同じくスーパーに向かつてゐる主婦などが歩いてゐるのがちらほら見えた。今頃、買い物を頼まれていなかつたら家でのんびりしながらゲームができたのに……。

面倒だなあ、と思つていたそのとき。

——ガラツ

と、何処から音がした。

何だろう？周りの人々が上をしきりに青ざめた顔で指差してゐる。

不思議に思つて、私も上を向いてみると……。

——吊り下げられていた鉄柱が、自分に向かつて落ちてきてい
た。

「えっ」

私は一瞬、頭が真っ白になつた。落ちてくる鉄柱が、まるでスローモーションのようにゆつくりと動いて見える。それと同時に、今日見た夢が脳裏にフラッショバックした。

「おい、早く逃げろ!!」

誰かが、そう叫んだ。逃げなければいけないのは頭では理解しているが、体がその場に縛りつけられたかのように固まつて動かない。必死に体を動かそうとしているが、相変わらず指の一本も動いてくれず、悲鳴をあげたくても、口が開いてくれない。周りの人たちは「早く逃げろ」と遠くで騒いでいる。正直言つて、五月蠅い。逃げたくても体が言うことを聞かないんだつてば。

そして、ついに。

何ともいえない鈍い音が、五月蠅かつたこの場所に響く。自分の全身に激痛が走り、口から真っ赤な血が吐き出され、コンクリートの地面に真紅の花を咲かせた。そのとたん、女性の耳を劈かんばかりの悲鳴が先ほどとは打つて変わり、静まり返った空間に響き渡る。

どうやら鉄柱は、私の体を貫いてコンクリートの地面に突き刺さっているらしい。実際、激痛に襲われている最中だが、微かに自分の体が浮いているのが分かる。簡単に言うと、串刺し状態になつていて。

……なんだか某プロジェクトのようだ。いや、普通はトラックが主流なのだろうけれど。ちなみに、こうして呑気に考えているが、体は滅茶苦茶痛いし、口の中は血塗れで気持ち悪いし、周りは五月蠅いし、目が霞んでくるしでいろいろとまずい状態だ。遠くで、救急車のサイレンの音が聞こえるが、それもだんだんと聞こえなくなつていく。
(……あの夢つて、結局こうなるんだろうな)

ふと、私は今日見た夢の内容を思い出す。

いつも、戦場にただ立つているだけの夢だったのが、今日に限つて、槍を持った男と戦うという壮絶な内容だつた。

(まるで、あのゲームみたいだつたな)

フツと小さく笑みを浮かべた。久しぶりにハマつてプレイしていいた、とあるゲーム。まだ全部クリアしていないが、世界観がとても好きだった。

(また、やれるといいなあ)

視界が、黒く染まる。その思いを最後に私は、意識を手放した。深い、深い、闇の中へと。

——おやすみなさい。よい夢を。

音が無い世界で、誰かがそう、呟いたような気がした。

1章 ある日、森の昼下がりにて 湖の畔

何がどうして、こうなったのか。自分でもよく覚えていない。ただ、解かっていることは……。

自分が転生した、ということ。

——これから、一人で生きなければならない。ということだ。私は今、一人ボツリと鬱蒼とした森の湖の畔^{ほとり}に座っている。人とう生き物は不思議なもので、死んだと思つたら赤ん坊になつていたり、自分の生まれ落ちた世界が“剣と魔法のファンタジー”的な世界観で、しかも古代インドとしても、年月が経つにつれて見事に適応してしまうらしい。

喻え、いきなり現れた神様から加護をもらつた数週間後に、それが原因で他の人に忌諱^{きい}され、この見知らぬ森で生活することになつたとしても。

……うん。本当に、何でこうなつたんだろう。

この森で生活すること早一週間。食べれそうな木の実や野草を探取しつつ、仲良くなつた動物たちと協力して、ここまで食い繋いできた。サバイバル知識がろくにない素人がよく一週間も生きていられたな、とつくづく思う。

しかも、今の私は五歳くらいの子どもだ。本当に今まで生きていたことが、不思議で仕方がない。……まあ、推測でしかないが、恐らく“例の神様”^{それほどもかく}がくれた加護のおかげなのだろうけれど。

閑話休題。

今日も今日とて食料を探さなければいけないのだが、何故かやる気がない。いや、冗談抜きで本当に。なのでこうして、湖の畔に座つてただボーッと空を見上げている。傍目からみたら、ただの不審者にしか見えないだろう。

「綺麗だなあ」

思わず、そう呟く。数時間前から見上げている空は、青く透き

通つており、雲一つ無いまさに晴天霹靂の空だった。

そうしてしばらくの間、現実逃避をしていると背後からガサガサと草が揺れる音がした。私は仲の良い動物たちの内の誰かかな、と気にはせず——後ろを振り向くこともなく——また、じつと空を見上げる。が、そろそろ飽きてきたし、いい加減に食料を探しに行かなければならぬので、立ち上がつてその場を去ろうとした。

そのとき。

「おい、お前。そこで何をしている」

後ろからいきなりしわがれた低い男の声が聞こえてきた。どうやら、先ほどの音は動物たちではなく、この声の主が草むらを踏み分けてきたときの音だつたらしい。

久しぶりに人の声を聞いたが、本当に人なのだろうか。もしかしたら、ただの幻聴かもしれない。恐る恐る後ろを振り返つてみると、そこには背に巨大な戦斧を背負つた、一人の壯年の男が立つていた。子どもがこんなところにいるのを不審に思つているのか、怪訝な顔つきをしている。

「何つて、ただ空を見上げていただけです」

「何で空を見上げていたんだ」

「現実逃避をしていたから?」

現実逃避?と首を傾げながらオウム返しのように言う彼。この世界にこの言葉が存在するのかは別として、それ以外の言葉が思い付かなかつたのだからしようがない。

自分のボキヤブラリーの少なさを実感していると、彼は鋭い目付きでこちらを見て、ゆつくりと口を開いた。

「現実逃避はよく分からんが、こんな鬱蒼とした森に一人でいるのは危ないだろう。親はどうした」

親。その言葉を聞いたとたん、ドクリリと私の心臓が歪な音を立てた。

「……親、ですか」

ふと、自分の脳裏に浮かんだのは、元気な姿で笑っている母の姿だつた。パツと花が咲くような、そんな笑顔が印象に残っている。そして、次に浮かんだのは……。

柔らかな肌を血に染め、息絶えた――。

ヒュツ、と短く息を吸う。深呼吸をしようとしたつもりが、それができずどんどん呼吸が浅くなり息苦しくなっていく。

「大丈夫か?」

異常を感じたのか、男が急いで私に駆け寄ってくる。返事をしようとするが、上手く喋ることができない。意識が、朦朧としてきてろくに頭も回らない……前にも似たようなことがあつた気がする。

そして、そのまま私は意識を手放した。

見知らぬ天井

深い、闇の中だった。

少しの間だつたが、この世界で一緒に生活をしていた大人たちが私を囲むように立っていた。よく見てみると、その中には前世で関わったことがある人もいる。

しかし、そこで私はある違和感に気付いた。

そこにいる彼らには皆、生物にあるはずの目がなかつたのだ。ポツカリと空いた目はまるで、洞窟にいる底知れないナニかが潜んでいるよう見えた。

そして、私がそれに気付くやいなや、彼らは日々に罵倒を浴びせてきた。

「お前は不吉な子どもだ。親だけ死んで、何故お前だけが生きている」「氣味の悪い姿だ。本当にあんたは人の子なの？」

「■■■■■つてなんか不気味だよね。何か言つても表情一つ変えないし」

「■■■■■、何でこんなこともできないの。将来、困るのは自分なんだよ？」

……ああ、五月蠅いな。だからなんだ、もう過去のことなのに。どうしてこうもしつこく夢に出てくるのか。君らの言うことはもう聞き飽きたし、何とも思わない。

普通は、この世界で死んだ母に罵倒される夢を見るのだろう。「何で私が死んで、お前は生きているんだ」と、そう言われて恨み言を散々吐かれるのだ。

今はまだそのような夢は見ていないが、いつか見るときがくるのだろうか。

——願わくば、どうかこの夢が早く覚めますように。

意識がゆっくりと浮上する。

私が目を開けると、灰色の見知らぬ天井が視界に広がった。やけに重い体を起こして回りを見渡してみると、なんとも質素な部屋がそこにあつた。

この部屋の主は今はいないようで、水を打ったようにしんと静まり返っている。

「……というより、なんでここにいるんだろう」

森で、過呼吸のようなものを起こしてしまったのは覚えているのだが、その後のことはさっぱり覚えていない。

きっと、森で会つた彼が私をここに運んで、介抱をしてくれたのだろうと勝手に自分でそう解釈し、体を起こしたときに捲れた布を再び自分にかける。

……もし、その予想が外れていたら、いろいろと詰んでしまうが。自分の予想が当たつていることを願いつつ、おとなしく待つているとカタン、と戸が開く音がした。どうやら誰かが帰つて来たらしい。しばらくするとミシミシと床が軋ませ、倒れる前に見た彼が部屋に入ってきた。

「お、起きたか。調子はどうだ」

「大分よくなりました」

「そうか」

「迷惑をかけてすみません」

私が頭を下げて彼にそう言うと、気にするなどでもいうように笑つて私の近くに座る。やはり彼が私をこの家に運んできたようだ。

予想が当たつたことに安堵しつつ、介抱をしてくれた礼を彼に伝える。

「介抱をしてくれて、ありがとうございます」

「どういたしまして。いや、それにしてもすまないことでしたな」

彼はばつが悪そうに頭を搔く。何かされたつけ?と疑問に思つていると、相手はとても言いづらそうに口を開いた。

「あー、その、親のことだ。まさかあんな反応をされるとは思つていなかつたからな」

「…………」

「そう怖い顔をするな。だから、悪かつたと言つてはいるだろう」

「……怖い顔をしてるつもりはないんですけど。親のことは、少し動搖してしまっただけです」

あの時は不意に聞かれたから、驚いてしまっただけで決して、地雷が爆発したのではない。誰がなんと言おうと、違うつたら違うのだ。

「そ、そうか」

彼は少しどもりながら、私から目をそらす。……そんなに怖い顔をしているのだろうか。前世ではよく仲の良い友人に、「某英雄ではないけれど、目で人を殺せそうなぐらい絶対零度の目をしているときがあるよね」と言われていたが、そんなに冷たい目をしているつもりはない。

ともかく、親に関する事はある程度、心の準備はできている。言葉にはしていないが、恐らく彼は私が何故あんな反応をしたのか気になつてはいるはずだ。私はひとつ、大きく深呼吸をした後にゆっくりと言つた。

「親は死にました。つい、最近のことです」

それを聞いて彼は一瞬、目を見開いたが、すぐさま納得したかのように頷く。

「……やはり、そうだったか」

「えつ」

彼の言葉に、私は思わずそう返してしまつた。まさか、気づかれているとは……。

「誰だつてあんな反応をされたら、さすがに察するだろう。それに、お前をここに運んで来るとき、少し麁されていたからな」

呆れたような顔で、彼は私にそう言う。確かに、いくら鈍感な人も聞いたとたんに過呼吸を起こされたら気づくか。おまけに、寝ていた時に麁されていたのなら尚更。

そう考えに耽つていてるうちに、私の眉間にしわがよつていたらしい。彼が自分の眉間に人差し指をトン、と軽く叩いて「しわがよつてるぞ」と私に教えてくれた。

「子どものうちからそんな顔をしていると、将来気難しい顔になるぞ」

「余計なお世話です」

氣難しい顔つて、どんな顔だよ。心の中でツツコミをする。考え方をしていると眉間にしわがよるのは、前世からの癖だから、しようがない。

その後、お腹は空いていないか?と聞かれたので、正直に空いてます、と伝えると果物を一つこつちに投げて渡してくれた。驚いて彼の顔を見ると、「なんだ、食べないのか?」と言われた。いや、食べるけれど……。

じつと、果物を見る。それは、前世でよく食べていた林檎だった。
……古代インドって、林檎あるんだね。初めて知ったよ。無花果とかアルブカラがあるのは知っていたけれど。というか、そのまま渡してきたってことは、丸かじりしろっていう意味かな?
……まあ、そのままでも食べれるし、いいか。

ガブリとそのまま林檎をかじり、咀嚼する。赤く熟れたそれはとても甘く、懐かしい味がした。

斧を持つた男と少女

さて、腹も満たされたことだし、今後の事を考えなければならぬ。今日は彼のおかげで食べ物に困ることはなかつたが、明日以降は自力でどうにかしないといけないからだ。

いつまでもここにいるわけにはいかないし。かといって、あてがあるのかといわれると、ないとしか答えられない。それに、すごい今更だが親切にしてもらつたとはいえ彼は赤の他人だ。介抱をしてやつたのだから、なにかお礼をしろと言われるかもしれない。……今までの様子を見る限り、それはありえないと思うが。

私の近くに胡座をかいて座つてゐる彼をチラリと見る。どこからか取り出してきたすり鉢のような容器に入れて、それを棒でゴリゴリと磨り潰している。

「なにをしているんですか？」

「これが？薬草を磨り潰して、薬を作つてゐるんだ」

ほれ、と言つて私にすり鉢を渡してくる。覗いてみると、すり鉢の中は緑色のペースト状になつた薬草があつた。つんとした草独特の臭いが鼻をくすぐる。

「何の薬ですか？」

気になつて、彼にそう質問をした。粉末ではないから飲んで使用する物ではないだろう。

「傷薬だな。色はこんなんだが、効き目は十分にある」

「なるほど……」

私の質問に答えると、彼は薬を作る作業に戻る。しげしげと興味深げに彼の作業を見ていると、彼はふと思いついたかのように顔を上げた。

「今更聞くのもなんだがお前、行くあてはあるのか

「ないですね」

「即答か。……じゃあ、これからどうするんだ」

どうするんだつて言われてもねえ。頑張れば、なんとかなると思う。でも、冬になつたら食べ物も少なくなるだろうし、少し厳しいか

もしれない。

……うん、どうしよう。

「どうしましようね」

「考えてなかつたのか」

一考えてなかつたです

そんなんで大丈夫か、と呆れたような顔で言われる。それに大丈夫じやないです、と返す。何故か溜め息をつかれた。すみませんね、何

するが、彼は顎こ手を当てて、なごみを考案はじめた。多分、私の

ことについて思案しているのだろう。

彼が結論を出すまで、私はただじつと、目を瞑つて待つてのこと

にした。

* * * * *

『貴女は、優しい子なのね』

私の目の前に立っている蓮の瞳を持つ女神は静かに微笑む。
かのじよ

『私は、優しくなんてないです。愚かで、残酷。そんな人間です』

自分が真実を言っているのか、はたまた嘘を言っているのかも解らない。そんな人間が、なんで優しい子だと言えるのか。

『いいえ、貴女は聰明で、酷く優しい。まるで青蓮のように美しい人間よ。』

ウトバラ
青蓮、か。花言葉は確か、
“清らかな心”

だつたような気がする。私には到底、当てはまらない言葉だ。

するりと、彼女は私の頬を撫でる。その手つきはまるで、繊細なガラス細工を壊さないように触れているかのようだつた。

『青蓮の愛し子。貴女に、
私の加護を授けましよう。純真無垢な貴女
が厄から逃れるために』

貴女が、幸運になれるようになります。

そう言つて、蓮の衣を纏つた女神は私に祝福を与えた。天からは美しい花が雨のように降つてくる。

『……シリ一様、何で私に加護を与えたのですか』

気まぐれな彼女が、人間なんかに加護を与えるなんて。明日は槍でも降つてくるのだろうか。いや、もしかしたら世界が滅亡するのかもしない。

そう思つてゐると、彼女——幸運を司る女神・ラクシユミーはただ
静かに微笑んで、こう言つた。

執拗に求めていないでしょう?』
わたくし

眞空に和の
心材

「おい起きろ、なに人が眞面目に考へて いるときに事者であるお前が寝ているんだ」

彼の文句を言う声で、パチリと目を醒ました。どうやら、目を瞑つて待つてはいるうちに寝てしまつたようだ。すみません、と素直に謝つて彼の方を見る。

「……そう、ですか」
「考えてみたんだから
あまりいい案か悪い案かなかくてな」

顔をうつむかせる。やつぱり、私はあの森で暮らすしかないのか。

マイナス思考に走りかけていたそのとき、男の力強い声が私の耳に入つた。

「一度、面倒を見た奴を見捨てるほど俺は薄情者ではない。かといって、このままこの場所にいるのは、お前の気が引けるだろう」

彼はニヤリ、と不敵に笑う。まるで、獰猛な虎が獲物を目の前にした。そんな笑顔だった。

「俺の、弟子になるつもりはないか」

「……弟子？」

私は首を傾げる。弟子って、よく少年漫画とかで見るやつだよね。
……私、運動神経あまりよくないよ？物を避けたり、隠れたりするの
は得意だけれど。

「そうだ。俺はしがないバラモン僧だが、たまに弟子になりたいと
言つて、武術の教えを乞う奴等もいる。今まで、そういう奴等にしか
教えていなかつたが、そろそろ自分で弟子をとつてみようと思つてい
てな」

なるほど、つまり『ちようど弟子をとろうと思つていたからお前が
なつてみない？』ということだろう。というかこの人、司祭バラモンだつたん
だ。私からしたら、雲の上に住んでいるような、そんな感じの人たち
だ。ちなみに、バラモンはヴァルナ——分かりやすくいうと階級制度
の最高位に属している。ヴァルナは司祭階級バラモン・戦士クラク・王族階級シャトリヤ・
庶民階級ヴァイシャ・労働者階級ショーラの四つに分かれている。他にはヴァルナに属さ
ない人、不可触賤民アンタツチャブルという人もいる。中学・高校で世界史を専攻した
人は、聞き覚えがあるだろう。

私はこの内の庶民階級に属しており、バラモンやクシヤトリヤを貢
納によつて支えることが義務とされている。なにが言いたいのかと
いうと、彼らに貢献する立場である私が、彼に弟子入りするのは到底
無理だということだ。普通なら、弟子入りするどころか、顔を合わせ
ることもできない。ただし、同じバラモンやクシヤトリヤだつたら話
は別だが。

しかし、不幸にも幸いにも私は、元現代人にほんじんだから、身分階級なんて
あまり気にしてはいない。が、郷に入つては郷に従わなければいけな
いときもある。私は正直に彼に自分の身分を伝える。殺されてしま
うだろうか、なんて思つていると、彼は意外なことを言つてきた。
「なんだ。そんなことか、別にお前が庶民階級ヴァイシャだろうが俺は気にしな
いぞ？少し驚いたがな。それにお前、どこかの神の加護を持つている
だろう」

「気にしないんですか。というか、確かにあなたの言うとおり、私は神
の加護を持つていますが……いつから気づいてたんですか」

「森で会つた時からだ。まあ、お前とは違うが、似たような奴と会つたことがあるからな。気配が独特だからすぐ分かる」

へえ、と彼の言葉を聞いて感心する。私以外にも似たような人がいるんだ。さすが古代インド。ファンタジーに満ち溢れている。一度、その人と会つてみたいな。

「で、どうする。俺に弟子入りするか?」

再度そう聞かれる。元々、武術には興味はあつたができるかといわると、そうでもない。よく、学校の授業で剣道をやるとき、竹刀を持つて素振りをしていると周りが「それで人を殴り殺さないでね!!」等と騒いだり、空手部に体験入部をしたときは「なんか、様になつていて怖い」とか言われていた。私をなんだと思つてはいるのか……。

閑話休題

とりあえず、彼が良いなら弟子入りさせてもらうことにした。すると彼は嬉しそうに笑つて「お前は鍛えがいがありそうだ」と言う。そりや、こんなにヒヨロヒヨロな体つきをしているからね。

「そういえば、まだあなたの名前を聞いていないのですが」

これから長い付き合いになるのだから、ちゃんと相手の名前を聞いておいたほうがいいと思い、彼に聞いてみた。私は、今世の自分の名前はあまり好きではないからな……でも、聞いたからには名乗らないと失礼か。

「俺の名か?——俺の名はパラシユラーマ。アヴァターラ巷ちまたでは、『戦士殺し』

とも呼ばれている

斧ハラを持つたラーマ。ヴィシュヌ神第六の化身であり、インド神話における聖仙ジャマダグニの子。二十一回に渡つてクシャトリヤを全滅させ、罪を犯したが故に、他の化身同様に天に昇ることができず、地上に留まつた神の代行者。

私は大きく目を見開く。かの有名なインド二大叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』に登場する彼が私の師となる人物だとは……。

「なにが“しがないバラモン僧”ですか。しがないどころかとても有名じやないですあなた」

「まだ十にもなっていない子どもが俺のことを知っているとは……。今は森に隠居している身だから『しがないバラモン僧』であつていいとおもうが?」

「あつてません」

「随分バツサリと言うな。ほら、俺は名乗ったから次はお前の番だ」「私は、あまりこの名前が好きではないんですが……私の名前は——、といいます」

まあ、私に似合わない名前ですよね。自嘲氣味にそういうと、彼は良い名前じやないか、と言つて褒めてくれた。

「お前がその名があまり好きではないというのならば、そうだな。青……は率直すぎる。お前は年の割には物言いがバツサリしているからな、小刀シャストルラとでも名乗れ。自分の真名が好きになれるまではな」

青、と呟いたのは私の瞳を見て言つたのだろう。私の瞳は青い蓮の花のような、鮮やかな青ブルーをしている。髪は透明感のある灰色アーレグレーで、この辺りでは見ない色だ。肌の色もこのインドでは珍しい色白の肌をしているので、とても目立つ。

「シャストルラ、ですか」

「ああ、そうだ」

小刀か。日本でいう短刀のようなものだろう。刀といえば、某刀剣擬人化ゲームを思い出す。気に入つたので、今度から人にはそう名乗ることにした。

「分かりました。ではこれからよろしくお願ひします、師匠」

「こちらこそ、よろしく頼むぞ。我が弟子。」

——かくして、彼女の物語が幕を開ける。ヴィシヌの第六の化身アヴァターラと彼女が邂逅することによつて、あるはずのないシナリオが世界に顕れたのだが、はたして、運命の転生者はこの人生ゆめに何を見るのだろうか。そのことは神のみぞ知る……。

2章　両雄との邂逅

数年後、ある日の会話

パラシユラーマに弟子入りしてから数年がたつた。私はまだ子どもと呼ばれるような年齢だが、それでも人並みに武術を身につけることができた。

彼の修行は過酷で、素人の私は何度も挫けそうになつたが、血を吐くような努力のおかげで最近では、彼の攻撃を防ぎ、彼から一本取ることができるようになつた。

彼が私に武術を教えるにあたつて、私に見出だした才能は四つ。一つは剣術。女ということもあり筋力は弱いが、ある程度鍛え上げたのと、とある方法を用いることで問題なく彼の重い一撃を受け止めることができる。二つめと三つめは弓術と馬術。弓術も腕の筋力が必要だが、これも剣術同様、問題はない。馬術は単に馬の扱いが上手かつたからで、特に特別なことはしていない。

そして四つめは真言。マントラ

師匠曰く、『お前は言霊が人並みより優れている』とのこと。なので、他の人が唱えるよりも効果が強く出るらしい。ちなみに普通の言葉にも靈力（魔力）を乗せても効果があるようで、これを応用して私は自分の筋力や身体能力を強化している。もちろん、真言に頼りすぎないように自分で毎日鍛えているが……。

「なんで筋肉があんまりつかないんだろう……」

そう、いくら鍛えても私のこの細い腕はなかなか筋肉がついてくれない。この前なんて友人ならぬ友鳥のラクタパクシャには『友の腕は己が掴んだら真つ二つに折れそうだな』なんて言われてしまつた。一応、目立たないけれどちゃんと筋肉ついてるのに……解せぬ。

「おい、シャストルラ。ちよつと話があるんだが

「何ですか師匠。また追加の鍛練メニューをやれ、とか言うつもりですか」

森で一人、訓練用の木刀を持つて素振りをしていると、後ろから彼

に声を掛けられた。今は鍛練中で、周囲の気配に気を配っていたこともあり、彼が来てもすぐに反応することができた。

「いや、そうじゃない。なんで最近、俺に対する当たりが強いんだ。反抗期か？ 反抗期なのか？」

前までは素直で可愛かったのになあ、とぼやくパラシユラーマ。あなたは私の父親か、いや義理の父親ではあるけれど。

「はいはい、そういう茶番はいいんで。話つてなんですか」

「お前なあ……まあいい、話つていうのは、王家の主催する競技会に参加してみないか、ということだ」

「競技会？」

「そうだ、ちなみに飛び入り参加可能だ」

「行きます」

思わず即答する。師匠以外の人たちと腕試しをしてみたいし、何より久しぶり町に行ける良い機会だからだ。ただひとつ、気になることがある。それは――

「師匠、あの、王家主催って言いましたよね」

「確かにそう言つたな」

「相手はクシャトリヤですが、私なんかが行つても大丈夫ですか」

そう、あの戦士クシャトリヤと王族嫌いの彼が何故、こんな話を持ち出してきたのか。とても嫌な予感しかしない。彼は片眉を上げて、愚問だなどでもいうような表情をする。

「大丈夫だろう。それに、お前は少し俺以外の人間と関わったほうがいいと思つたからな」

「……その本音は？」

「競技会で自慢げに武術を披露している奴等の面目を潰してこい」「ですよね」

とても良い笑顔で言い切つたよこの人。そして、師匠のクシャトリヤ嫌いは相変わらずですね。

競技会に行くため、私は自分が纏っている外套のフードを深く被る。一応、服装も男物にし、胸は目立たないように布を何枚か巻いておいた。競技会に出るからには、『女』の格好で行くのはまずいだろ

う。一人称は……そのままいいか。『男』でも『私』っていう人いるし。声もまあ、大丈夫だろう。顔を隠せば女とは判らないと師匠から言われたし。

そして最後に彼から貰つた片刃刀タルワールと、自分で作つた弓を携えて、準備を終える。

「では、行つてきます。大会の状況によつては、帰りが遅くなるかもしれません」

「おう、分かつた。行つてこい、楽しんでやれよ」

ヒラリと片手を上げて彼は私を見送る。ここから町まではだいぶ遠いからなあ、仕方ない。走ろう。

地面を勢いよく蹴つて、走り出す。なだらかな下り坂が続いているので、結構スピードが出る。……もしこれで間に合わなかつたらどうしよう。

不安になりながらも、私は町まで急いだ。このとき、私は気づいていなかつた——自分が参加しようとしている競技会が、あのクル族王家の主催する競技会だということに。

波乱の競技会

晴れ渡つた青空の下、賑やかなラッパと太鼓の音が鳴り響き、数万の観衆がきらびやかな広場に集まつていた。

クル、パーンドウの兄弟たちがそれぞれ己の優れた武芸を披露し、大会最後のハイライトである褐色の精悍な顔立ちをしたインドラの息子・アルジュナが剣、弓、棍棒、槍の妙技を終え、いよいよ大会の幕が閉じられようとした時、それは起こつた。

広場の入り口近くでシャラリと金属のぶつかる音と、ズザーッと土が擦れるような音が響いてきたのだ。観衆と王家の王子たちは何事かと一斉に入り口を見る。

そこには、二つの人影があつた。一つは黄金の鎧を身につけ、黄金のイヤリングを煌めかせた青年。その非の打ち所のない美貌は、落ち着いた様子で辺りを見回している。そして、もう一つは息を切らしている、フードを深く被つた少年。顔こそは見えないが、華奢な体つきをしていた。

「……大丈夫か？」

黄金の鎧を身に纏つている青年——カルナは自分の後からやつて来た少年に声を掛ける。男にしては、小柄なその体は上下に揺れていて、今にも倒れそうだ。少年は律儀に、途切れ途切れだが返事を返す。「わた、し、は、だいじょう、ぶです。しんぱい、してくれて、ありがとうございます」

「そうか」

それを聞くとカルナは前に向き直り、広場の中心に足を運ぶ。一方、少年と見事勘違いされたシャストルラは、ぎりぎりのところで大会に間に合つたことに安堵していた。結構な距離を走ってきて、息を切らしているが、軽く息を整える。

サツと広場の中央に足を運んだカルナの後を追つて、彼女も広場に入つた。先に飛び入り参加していた彼は、アルジュナが披露した技をすべて完璧に再現していた。

さらに、カルナはアルジュナに決闘を申し込み、それをここぞとば

かりにドウリーヨダナが歓迎していたのだ。そのせいか、広場は騒然とした雰囲気になつてゐる。

その中心に立つてゐる黒と白の人物。アルジユナは飄々とした様子でいるカルナに向かい、語氣鋭く言い放つた。

「……招かれざる闖入者^{ちんにゆうしゃ}の分際で、勝手な真似をしないでいただきたい」

「この広場はすべてのものに開かれているはずだ。現に、オレ以外にもこの場に立とうとしている者がいる」

「なに?」

カルナがさらりと言つた言葉にアルジユナは眉をひそめる。すると、ざわめく観衆の中から先ほど息を切らしていた少年^{かのじよ}が姿を現した。深く被つたフードの下に見える青の双眸は真つ直ぐ二人を見つめている。

「彼の言うとおり、私もこの競技会に飛び入りで参加しに來ました。
……君らからしたら無礼な行為かもしけれなけれど」

「そういうことだ。お前が歎^{たん}じている暇はない。早くその弓を構える
がいい」

鋭い目付きでアルジユナはカルナを見据え、シャストルラはやれやれとでもいうように首を竦める。

空はいつの間にか厚い雲に覆われ、その下を雷光が龍の如く走り去さり、雷鳴を轟かせた。インドラ神が己の息子アルジユナに味方しているのだ。それを知つたのか、スーリヤ神は太陽の強い輝きでわが子カルナの頭上の雲を追い払う。

いつの間にか、会場はドウリーヨダナ側とパーンドウ側に真つ二つに割れ、貴婦人たちもそれらに釣られて敵味方に分かれていた。ちなみに、アルジユナへの挑戦者の一人が、自分が最初に産んだ子供、カルナであることを知つたクンティーは氣を失つていた。

そんななか、シャストルラは随分と冷めた目でアルジユナ側とカルナ側に分かれた観衆、そして王族たちを見てゐる。他の人々は気づいていないが、彼女の周りには夢い幻想的な蓮の花が咲いては消えてゐる。ささやかながらも、女神ラクシュミーは彼女を応援してゐたの

だ。

といつても、シャストルラはその幻の蓮を見て喜ぶどころか、心の中で『目立つからやめて!!』と叫んでいたのだが……。

しかし、不幸にもそれに目敏く気づいたカウラヴァの王子・ドウリーヨダナにシャストルラは声を掛けられてしまつた。

「そこの蓮に愛されし者。お前もアルジュナに決闘を望んでいるのか」

「いいえ、違います。カウラヴァの長兄殿。私はただ、自分の武術の腕を確かめるが為にここに参上したのです」

内心、ヒヤヒヤしながらシャストルラはドウリーヨダナの問いにそう返した。

「ふむ、そうか。ならば、今ここでお前の腕を見せてみよ」

突然、ドウリーヨダナが放つた言葉に騒然としていた広場が静まり返る。そう言われたシャストルラは少し戸惑いの表情を浮かべた。「私が得意なものが、その、剣なのですが……。相手がいないので、披露のしようがありません」

「では、弓はどうだ」

「一応、出来ますが

「ならそれをやれ」

「……分かりました」

諦めの表情でシャストルラは広場の中心に出て、弓を構え矢を刺す。周囲の人々は、あんな細腕の少年が弓を引けるわけないだろうと鼻で笑っていたが、次の瞬間。勢いよく放たれた矢が「バンッ」と木で出来た的を粉碎したことによつて、自分たちの認識が間違つたことを悟る。

「……しまつた。力加減、間違えた」

少年がポツリと呟く。^{シャストルラ}それを聞いた周囲の人々と王家の人は嘘だろ、とでもいうように一斉に彼女に視線を向ける。その近くにいたカルナとアルジュナにいたつては、驚いたように目を見開いて、彼女を見ていた。

頬を搔きながら、彼女はドウリーヨダナに体を向け、気まずそうに

話し掛ける。

「あの、すいません。的を壊してしまって……これでいいですか？」

「あ、ああ。十分だ。よくやつたな」

二重の意味を込めて、そう言つたドウリーヨダナ。まさか、こんなに小柄な少年が、矢で的を粉碎するとは思つてもいなかつたのだろう。

「ありがとうございます……？」

しかし、ドウリーヨダナの言葉に込められた意味をよく解つていな
いシャストルラ。ついでにいうと、彼女の周りは、先ほどよりも多く
の蓮の花が咲き誇つては、風に揺れて消えている。

女神ラクシユミーよ、少しさはしゃぎすぎではないだろうか。

そんな微妙な空気が漂うなか、勇気を振り絞つて軍師・クリパが
シャストルラに「今からここで、決闘を行う。そなたは観衆側に戻つ
てもらつてもよいか」と伝える。それに「分かりました」と頷いて、彼

女はすぐに広場の中心から退場する。

ホッと安心したかのように、息をつくクリパ。気を取り直して、カルナとアルジユナの間に立ち、決闘の立会人として厳かに宣告した。
「決闘のしたきりとして、互いの素性を明らかにせねばならぬ。アルジユナはクンティー王妃の三男であり、パーンドウの王子だ。」

——挑戦者よ、そなたの素性を明かすがよい。王族は己より下位の
者とは決して決闘は行わないのだ。

その言葉を聞くと、カルナは雨に打たれた花のように深く頭を垂れ
てしまつた。王族か、それ以上の位の出ではなかつた彼は、自分の素
性を明かしたところで、断られてしまうのが目に見えているのを理解
していたからだ。

一言も言わず、黙り込んでしまうカルナ。そんな彼に救いの手を差
しのべたのは、ドウリーヨダナだつた。

「もし、この者が王族ではないから闘わないというのなら、俺はたつた
今ここで彼をアンガ国の王にしよう。さすれば、誰も文句を言うま
い」

ドウリーヨダナの大胆な宣言に、それまで静まり返つていた広場

は、わっと大歓声に包まれた。彼の言葉で、即座に王位就任に必要な儀式がその場で済まされ、カルナはめでたくアンガ国の王となつた。

そして、いよいよ決闘が行われると思われたその時。一人の老人がカルナの側に歩み寄つた。その姿を見るや否や、彼は弓矢を置き、戴冠式の灌頂^{かんちょう}で水が滴つている自らの頭を深々と下げる。

老人——アデイラタは、濡れたカルナの頭を拭き「わが子よ」と呼びかけ王になつたことを祝福した。

しかし、

「なんだ、お前は御者の息子だつたのか」

カルナに歩み寄つた老人がドリタラーシュトラ王の御者、アデイラタであるのを知つたビーマは、からからと笑つた。

「御者の息子がアルジユナに決闘を挑む資格はない。アンガ国の王など笑止千万！剣の代わりに鞭を振るつておとなしく馬の尻でも追いかけていろ」

ビーマが浴びせた罵倒に、カルナは唇を噛みしめる。そこで、ドウリーヨダナが立ち上がり、言葉を発しようとしたが、凛とした声が響き、それを遮つた。

「いくらなんでも、そんな言い方はないと思いますが

「なんだおまえ。この俺に口答えするのか」

「口答えをするとは、誰も言つていませんが？私はただ、あなたの言い方はないと言つただけです」

ビーマの視線の先を見ると、そこには観衆に紛れていたシャストルラが再び広場に姿を現していた。その目は冰雪の如く冷たい。一瞬、ビーマは彼女の目を見て怯む。その隙に、すかさずドウリーヨダナがシャストルラの言葉に続くようビーマに言つた。

「そうだぞ、ビーマ。この者の言うとおり、そんな言い方はあるまい。鬪うことが我々、戦士の宿命ではないか。相手が自分より下位であろうとなからうと、雌雄を決する時に水をさすのは無粋だろう」

それに、と彼はビーマを睨み付けてこう言つた。

「英雄も河も源は同じではないか。両方も源流は分からぬ。わが師ドローナは水壺から、軍師クリパは草むらから生まれている。お前

だつてそうではないのか？輝かんばかりの黄金の鎧と耳環を身につけた、太陽のようなこの男が、どうして只人から生まれたりするものか」

——彼はアンガ国のみならず、全世界と俺の友情をほしいままにするに値する男だ。俺の言葉に不満があるものは、この場にて彼と共にその弓をへし折つてみるがいい。

ドウリーヨダナの熱弁に群衆は歓喜した。ちょうどその時、日は沈み辺りは暗くなり、今が潮時とみたドウリーヨダナはカルナの手をとつて広間から姿を消し、パーンドウ兄弟たちも自らの師と共に帰城の途についた。

人々に紛れて、シャストルラも帰ろうとする。が、突然後ろから何者かに腕を捕まれ、そのまま人の少ない場所まで連れていかれてしまつた。

振りほどこうとするが、なかなか相手は手を離してくれない。心中で、彼女はパラシユラーマに謝罪の言葉を述べた。

（すみません、師匠。やつぱり帰りが遅くなりそうです）

しかし、このときの彼女はまだ知らない。彼女が連れ去られる場所が、王宮だということを……そして、そこでまた彼らと再開するということも。

不屈と太陽

帰ろうとしたところ、いきなり腕を捕まれ、そのまま彼——カウラヴァの三男、ドウフシャーサナに人気のないところを歩いてどこかに連行されているシャストルラは諦めの表情を浮かべていた。何故、こんなところに王家の人がいるんだ。全員、城に帰つたのではなかつたのか。等と心の中で文句を言つてゐるが、相手は知るよしもない。「あの、この手を離してくれるとありがたいのですが」

「それは無理ですね。兄上……ドウリーヨダナに貴方を連れてくるよう言われたのですから」

「王家の人間が護衛も連れずに、たつた一人ですか？ 私があなたに何かしらの危害を与えるかもしないのに」

「……護衛なんて連れてきたら、目立つでしょう。それに貴方は、人に理由もなく危害を与える人間には見えません。野蛮な人間は、人を庇う様な真似はしませんから」

淡淡と、そう話すドウフシャーサナ。今日の競技会での私の行動を言つているのだろうか……それにしても、ドウリーヨダナが私を連れてこい、と言つた理由が氣になる。

「何故、ドウリーヨダナ様が私を連れて来いと？」

「貴方に興味があるからだそうです」

「興味？」

「ええ、そうです。……こんな細腕の少年が、どうやつて的を破壊したのかが気になるようで」

「はあ、そうですか」

細腕の少年、ねえ。やつぱり、顔を隠して男物の服を着るとそう見えるのか。……腕が細いと言われたのが軽くショックだが。

やがて会話が途切れ、二人でツカツカと無言で歩き続ける。次第にひとけが増えてきて、賑やかな城の近くまで来た。……ちょっと待つて。このまま城に入るつもりじゃないよね？

シャストルラの懸念したとおり、そのまま腕を掴んだ状態で城の中に入つていくドウフシャーサナ。そして、彼に言われるがままに、宴

会の席に同席することになってしまった彼女はただひたすら遠い目をしていた。

「そう、何故ならば……。」

——まさか、ここが型月世界軸^{タイプムーン}の古代インドだなんて、思いもしなかつた。

今更、この事実を思い出していたからだ。競技会にギリギリ間に合ったとき、カルナに声を掛けられたのだが、このとき「何か聞き覚えのある声だな」ぐらいにしか思っていなかつたのだ。しかし、広場に着いて中心にいた彼らを見たとき、思わず自分の頬をつねつてしまつた。

何故なら、自分が前世にハマっていたゲーム『Fate/Grand Order』に登場していた二人がそこに立つていたからだ。

何で気づかなかつた、私。この世界に生まれてから気づける要素は十分にあつたはずなのに。精霊とか、神とかそんな存在が身近にいたせいか、感覚が鈍つっていた。人間の適応能力つて恐ろしい。しかも『マハーバーラタ』の世界軸でもあるとか、死亡フラグ満載じやないですか。というか、本当に何で私ここにいるんだろう。

「どうした。先ほどから何やら考え込んでいるが」

一人、頭を抱えながら隅っこほうで座つていると、華やかに着飾つたカウラヴァの長兄、ドゥリーヨダナがこちらに近づいてきた。「何で私がここにいるのか、ということを考えていただけです」

「そりやあ、俺がお前に興味があつたから、わざわざドウフシャーサナに連れてくるように頼んだからだな。あと、堅苦しいから敬語は使わなくていい」

「わかつた」

すんなりと敬語をやめて、返事をする。彼は満足したのか、笑つて私に手招きをしてきた。近づいていくと、手首をガシッと掴まれて、ズルズルと賑やかな宴会席に連れていかれる。

「いきなりなに!」の手を離してくれると嬉しいんだけど?」

「だが断る」

「ふざけるな」

言い返すと鼻でフツと笑われる。マジでふざけるな。後で背負い投げでもしてやろうか。

そう思つて いるうちも、ズルズルと引きずられて華やかな宴会席に連れていかれる。

「お前、普段ちゃんと食つてるのか？手首細すぎだろう。よく弓なんて引けたな」

「失礼な、食べているよ」

「嘘だろ」

「ここで嘘をついて何になるのさ」

ため息をつきながら、彼にそう答える。人がちゃんと食べてるのか心配するとか……君は私の母親か。この人、物語的にいうと悪人のはずなんだけど。

悶々と考えていると、いつの間にか一番賑やかな宴会席の近くまで連れて来られていた。パツとそこでようやく手を離される。彼はここに座れ、と自分の近くを指差し、私はそこに渋々座る。そして、適当な果物を私に投げて渡してくると、「それでも食つて待つてろ」と言い残してそそくさとどこかに行つてしまつた。

ワイワイと騒がしい広間。きらびやかな衣装を着た踊り子たちが軽快に舞い、樂士たちが音楽を奏でる。

「騒がしいのは、あんまり好きじゃないんだけれどな」

ドウリーヨダナに渡された果物を食べながら、小さく呟く。今まで静かな森で過ごしていたせいか、こういう賑やかなところはなかなか落ち着かない。

「待たせたな……なんだ、お前あまり食つてないのか」

「君が帰つて来るまでの、この短い間に食べきれるわけないでしょ？」

「ただ単に、お前の食べる速度が遅いだけだと俺は思うが」

「君は“配慮”という言葉を知つてる？」

「失礼だな。知つているに決まってるだろう」

私の発言にムツとした顔をするドウリーヨダナ。本当に知つてゐるのか疑わしいが、とりあえず私は彼の隣にいる人物について、質問をする。

「ところで、ドウリーヨダナ。隣にいる彼は？私の見間違えでなければ、アンガ国の人だと思うのだけれど」

「ああ、そうだ。我が友、カルナだ」

誇らしげに、彼は胸を張つてカルナを紹介する。湖の湖面のように静かな瞳は、まっすぐに私を見つめている。

「オレの名はカルナという。……お前とは、競技会で一度言葉を交わしたことがあるが、覚えているだろうか？」

「もちろん。覚えてますよ」

「おい、お前。敬語」

「あ、すいま……ごめん」

ドウリーヨダナに言われて、慌てて敬語をはずす。いや、だつて。思わず敬語を使つてしまふぐらい彼は貫禄があるんだよね。「別にお前がどのような言葉を使えどオレは気にしない。好きにするといい」

「えーっと、ありがとうございます」

要是、自分の話しやすい喋り方でいい……ということだよね。彼にお礼を言い、今度は自分の名を名乗る。

「私の名はシャストルラといいます。と、言つてもこの名は師がくれた名前なので、本名ではないのですが」「そうか。よろしくたのむ」

一応、正直に自分の名前は仮名ということも伝えておく。すると彼はコクリと頷き、そう言つてきた。ドウリーヨダナは意外そうな顔をして、私を見る。

「お前、師匠がいるのか」

「言つてなかつたつけ？」

「初めて聞いたが」

お前の師匠は誰なんだ、と聞かれる。どうしよう。別に教えていいんだけど、この先のことを考へるとなあ。あと師匠で思い出したけれど、いい加減帰らないと怒られる。遅くなるとは伝えてあるが、いくらなんでも深夜になるまで帰らなければまずい。

「秘密。それに、いい加減帰ないと師匠に怒られるので帰りたいん

だけど

「そうなのか？」

「はい。……多分、今頃怒り心頭で待つていると思います」

戦斧を構えて出迎えてくるパラシユラーマの姿を思い浮かべるシャストルラ。そこから住んでいるマヘンドラ山全体を使つた逃走中が始まるのが目に見えている。

早く帰らないと危ない。主に私の命が。

サツと一瞬にして私の顔が血の気が引いたのを見た二人は心配そうにこちらを見ている。今からまた走つて行けば間に合うだろうか。いや、着いたところで息を切らしているのだからその隙にザクツと殺られるかもしねれない。

「……大丈夫か」

「大丈夫です。なんとか逃げ切つてみせますので」

「お前は一体、何の話をしているんだ」

心配するカルナと呆れるドウリーヨダナ。その時、フワツとどこからか風が吹いてきて一羽の、赤い翼を持つ鷹が現れた。神々しく光輝くその鳥はくるりと一周、広間を旋回する。その姿を見たシャストルラは左腕を上にあげ、鳥が留まれるようにした。

『バサリ、と熱を発しながら彼女の腕に留まつた鷹——』
『赤い翼を持つ者』はその鋭い嘴を開いた。

『友よ、御前の師から「いい加減に帰つて來い」と言伝を預かつてきだ。帰りは己が送つていくから安心しろ』

『あー……やつぱり。そろそろ帰らなきやまずかつたか。伝言をありがとう、ラクタパクシャ』

『礼には及ばない。友の為ならば己は何処へだつて飛んでくるぞ』
『それならば安心だね。相変わらず頼もしいことを言ってくれる』

そんな会話をしているなか、ドウリーヨダナは真っ青な顔をして、カルナは興味深い様子でラクタパクシャを見ており、広間はいきなり登場したこの鳥に驚いて騒がしい雰囲気になつていた。

『おい、お前。まさかそいつは……』

『うん？ ああ、ラクタパクシャだよ。私の友人ならぬ友鳥。綺麗で

しよう?」

「いや、ドウリーヨダナが言いたいのはそういうことではないと思うが」

少しずれたことを言つたシャストルラに、カルナは冷静に答える。とうとう我慢の限界だつたのか、ドウリーヨダナは声を上げる。「そいつは……鳥の王、ガルダではないか!何故、偉大なる神鳥がこんなところにいるんだ!!というか、何でお前はそんな奴と仲が良いのか。おかしいだろ!」

「ドウリーヨダナ。落ち着け」

「カルナの言うとおりだよ、何でそんなに驚くのさ」

『友よ、あの人子のような反応が普通ではないのか。己は滅多に人前に姿を現さない故』

「そうかな?私、この間タクシヤカに会つたけれど』

「タクシヤカ!?あの竜の王か!』

「うん、そうだけど……』

自分の知り合いの大半が、とんでもない面子とはよく理解しているシャストルラ。一方のドウリーヨダナはキヤパシティーオーバーのせいか、頭を抱えていた。それを冷静に見ているカルナがポツリと一言、呟く。

「……ところで、お前は帰らなくていいのか」

「あ、忘れてた。ありがとう、カルナ」

じゃあね、と言つてガルダことラクタ・パクシヤが入つてきて、もう窓に駆け寄つていく彼女。そこから勢いよく窓の縁を蹴つて、飛び降りていつた。

ここは城の二階だ、なのに彼女は躊躇いもせずに飛び降りていつた。人々は驚いて、一斉に窓に近づいて行こうとする。その時、下から炎の如く揺らめく赤い光が上に一直線に登つてきて、闇の中で煌々と輝き、瞬時に飛び去つた。

「ラクタ・パクシヤ、迎えに来てくれてありがとう」

『なに、気にするな。友の身の安全のほうが大切だからな』
「身の……安全……。師匠とのリアル鬼ごっこ……。考えると頭が痛

い

心地よい夜風に吹かれながら、私はラクタパクシャと話す。彼は普通の鷹の大きさから、人間が一人乗れるくらいの大きさになつていった。

「それにしても、今日は波乱の一日だった。なのに帰つてから師匠の説教（物理）とか……」

『頑張れ。友なら余裕で逃げられるだろう』

「君は私をなんだと思つているんだ」

『他の奴に自慢できるほど強い友人だと思つているが？』

「師匠ほど強くないよ。私は

満天の星空を見上げながら、私は言う。チヤンドラ月が優しく照らすこの常

闇の世界に、その言葉はやけに大きく響いていた。

雷帝と正法子

ラクタパクシャに送つてもらつた後、案の定シャストルラの想像通り、戦斧を構えて出迎えてきたパラシユラーマ。一見、笑つているようく見えるが、その目は据わつている。

「遅かつたな、我が弟子よ。まさか、競技会が真夜中まで行われていたわけではあるまい」

「はい、あの……すみませんでしたっ!!」

九十度に頭を綺麗に下げるシャストルラ。下手な言い訳をしたら殺られるのは目に見えている。かといって、正直に『カウラヴァの長兄に呼び出されていた』だなんて言つた暁には、「ほう、そうか。王族クシャトリヤがお前に何の用が……少し待つてろ」と言つて話し合い（物理）をしに行くに違ひない。

さて、どうしよう。師匠は黙つたままだし。このまま『逃走中 in マヘーネドラ山』師匠と楽しいリアル鬼ごっこ』が始まつてしまふのか。

「師匠……。師匠？あの、なんで空を仰いでいるんですか？」

「いや、お前はなんというか、潔いな」

「……はい？」

片手で顔を覆つて、「はあ」とため息をついたパラシユラーマ。彼は私が顔を上げると、早くこちらに来いとでもいうように手招きをしていた。側に寄ると軽くデコピンをされる。

「うわっ。なんですか」

「今日のところはこれで済ませてやる。夜も遅いし、さつさと寝ろ」「……？分かりました」

師匠にしては珍しい。まさかこれだけで済まされるとは思いもしなかつた。てつきり、怒り心頭で待つていたから説教をされるのかと思つていたのに。明日は槍でも降つてくるのだろうか。

まあ、いいか。彼の言われた通りに、さつさと寝てしまおう。いろいろあつて疲れたし。

スッと彼の隣を通りすぎて、自分の部屋へ向かう。窓辺には、先ほ

ど私を送つてくれたラクタパクシヤが留まつていた。月明かりに照らされているその姿は、とても幻想的だ。

『どうやら怒られずに済んだようだな』

「うん。師匠にしては珍しいよね』

『まあな。あの破天荒な奴が怒らないのは、多分御前おまえだけだろう』

『え。私、結構怒られてると思うよ』

『そうでもないぞ』

バサリ、と翼を広げて中に入つてくる彼。次の瞬間、赤い炎に包まれたかと思うと、一人の少年がそこに立つていた。鋭い金の瞳は私を射ぬいている。私より頭一つ背の高い少年は、ポンと私の頭に手を乗せ、口を開く。

「御前は正直者だからな。それに自分の武術の腕を上げるが為に、日々努力をしているだろう」

「私は、正直者なんかじゃないよ。自分の保身にすぐ走つてしまう。弱い人間さ。武術だつて、それこそ血を吐くような努力をしなければ、あの人には追いつけないしね」

「……その後ろ向き思考は、どうにかならないのか」

「これでも、昔に比べればまだマシなほうだよ」

人の姿になつたラクタパクシヤは、私の頭をゆつくりと撫でる。心地よい暖かさに、思わず目を瞑つてしまいそうになる。

「……君は、相変わらず暖かいね」

「御前は昔から体が冷たいからな。余計だらう……まるで、海底まで行つてきたかのよう^{からだ}に冷たい身体だ」

そう言うと、ぎゅっと抱き締めてくる彼。さらりと彼の赤い髪が流れて私の首筋にかかる。きっと、海の底に潜む竜王の都に彼の母とナーガたちで行つたことを思い出しているのだろう。

「私は、大丈夫だよ。海の底に沈みはしないし」

「……だが、タクシヤカと会つたのだろう?」

「いつも、ちゃんと帰してもらつていてるから、安心していいよ」

私がうとうとし始めたのを見てか、体を離して彼は私を横にする。

「そう、か。でも気を付けるに越したことはない。彼奴は油断ならな

い、狡猾な奴だからな」

「うん。分かつてる、よ」

コクリと頷く。だんだん目が重くなつてくるが、それに逆らつて、
目を開こうとするトラクタパクシヤは私の目に手をかざす。……大
人しく寝ろという意味だ。

「お休み。我が友よ、はつくり休め」

優しい炎の暖かさに、意識が微睡む。彼が側にいると、何故かとても安心するのだ。

——人といふるときよりも、ずつと

『御前は、
おまえ
不思議な人の子だ』

珍しく、人の型をとつて いる鳥の王・ガルダは 目の前に いる青蓮の
愛し子をまじまじと見て、 そう言つた。

『そう？ 私からしたら、君が人に成れることのほうが、よっぽど不思議だよ』

淡々と、シャストルラはガルダの言葉に答える。その青の瞳は、彼に向けられることはなく、ただ蒼空を見つめていた。

『……神でさえも「」を恐れて近づいて来ないというのに』

自分を乗り物としているヴィシュヌ神とその妃ラクシユミーは別だが。この人の子は、自分に声を掛け、しかも何の躊躇いもなく、炎の如く熱を発する自分の体に平気な顔で触れて来るのだ。

『けれどこれい』

空を見つめていた瞳が、ガルダを映す。情けないが、彼女にその目を向けられた瞬間、たじろいでしまった。――ぞつとするほど、空虚な瞳をしていたから。しかし、それは一瞬のことと、すぐに自分の見

知つた光を宿した瞳に戻る。

『御前は肝が据わつてゐるな』

『そうでもないよ。たまに、君のその黄金の瞳が、怖いと感じるときもある』

じつと、彼女が自分を見つめる。随分と素直に物を言つてくるな……そこが、彼女の美点でもあるのだが。

『己も、御前のその碧の瞳が恐ろしいと感じてしまうときがある。まつすぐで、何もかも見透かしている。そんな目だ』

あえて、空虚な瞳だとは言わない。彼女は時に、他の人間が言葉を発していなくとも、その心情を見抜くのだ。だから、己の言ったことはあながち間違いではない。神鳥である自分も、不思議とこの人の子に心の内にある感情を見抜かれている気がしてならないのだ。

『神様に、恐がられる様な目はしていいと思う……』

そう言つて、少し落ち込んでしまった彼女。すまない、と言つて灰色の頭を撫でる。すると、驚いたようにこちらを見て、照れ臭そうに俯いてしまつた。

『びっくりした……君の手が、あまりに暖かいものだから』

『そうか？ 御前の体が冷たいからだろう』

頭を撫でていた手を、彼女の頬に当てる。ひんやりと、冷水に浸つていたかの様に冷たい。母と、千匹のナーガたちと行つた、海底に潜む竜王の都の薄暗い冷たさを思い出す。

——ガルダ、彼女をお願いね。まもつてあの子、酷く優しい子だから。

ああ、そうだな。己はこいつを護らなければいけない。だつて、こんなにも脆く、儚い存在なのだから。

——小さき友よ、御前をどこまでも己は見守ろう。

* * * * *

競技会の次の日、パラシユラーマにこれでもかというほど、手合わせで扱かれたシャストルラ。どうやら、昨日鬼ごっこをしなかつたツケが今日に回ってきたようだ。

「あー。どうせなら昨夜鬼ごっこをしていたほうが、まだ良かつた気がする……」

『まあ、そう言うな。これからまた町に行くのだろう?』

「うん。気分転換に』

『近くまで送つていくか?』

「お願ひするよ』

『承知した』

昨晩とはうつて変わつて、鳥の姿に成つていたラクタパクシャ。その背に乗つて、町の近くまで行つてもらい、そこから歩いて町に入る。昼の町は人に溢れており、とても賑やかだつた。……そのせいで、軽く人酔いをしてしまつたが。

ふらふらと一人、気の赴くままに町をぶらつく。すると、どこかから金属同士がぶつかる音、矢が空気を裂く音が聞こえてきた。訓練場でも近くにあるのだろうか。興味本位で、音のする方へ行つてみる。「……ここか

覗いてみると、男の人たちが一生懸命に武術の訓練をしていた。やつぱりここは訓練場らしい。ウズウズと血が騒ぐ。飛び入り参加は、しても良いのだろうか。

「そこで、何をしているのですか」

「つーびつくりした。いや、ただ彼らの様子を見ていただけです」

油断していたせいか、後ろから近づいてきた気配に気づかなかつた。思わず飛び上がつてしまふのも無理はない。後ろを振り向くとそこには、目を丸くしているアルジュナが立つていた。

「貴方は、昨日の……」

「はい。競技会に飛び入り参加した者です。昨日は無礼な行為をしてしまい。申し訳ありませんでした」

「いえ、そんなことは

私が謝ると何故か口ごもる彼。……私、アルジュナに何かしたつけ? 訝しげな顔で彼を見上げる。その整つた顔は困惑した表情を浮かべていた。

「どうかしましたか」

「……失礼ですが、近くでみると、その、とても弓を引いて的を破壊できるような人物には見えなかつたので

「なるほど？」

なにさ、君も私が華奢で細いと言いたいのか。そして、ドウリーヨダナと似たようなことを言わないで欲しい。

「それで、貴方は何故ここに？」

「町を歩いていたら、金属のぶつかる音が聞こえてきたので。気になつてここにきました」

「そうですか。もしよければ、貴方も参加してみますか？」

「え、いいんですか？」

アルジュナの言葉にパッと顔を明るくする。あ、でも昨日の様子を考えると、身分とかそこら辺は大丈夫なのだろうか。というか彼、今から訓練に参加するんだね。

「ええ、この訓練場は全ての者に開かれています。……それに、昨日の競技会で貴方は『剣が得意』と言つていたでしょう？その腕を見てみたいと思いまして」

「そういうことですか。以外ですね。てつきり、弓の腕を見たいと言われるのかと思つたのですが……」

「確かに、弓の腕も気になりますが……」

若干、遠い目をしながら言うアルジュナ。昨日のことを思い出しているのだろう。うん、言いたいことは分かるよ。

「えっと、すみません。とりあえず、中に入りましょう

「そうですね」

では、お先にどうぞ。と彼は言う。あれ、そこは自分が先に入ることなのでは？私、一応部外者なのに……。不思議そうな顔をしていると、彼は「私が先に入つてしまふと、貴方が入りにくくなつてしまふので」と、苦笑してそう言つてきた。ああ、なるほど。彼は人気者だから、人だかりができてしまうのか。

じやあ、遠慮せずに先に入つてしまおう。「失礼します」と小さく呴いて入る。キヨロキヨロと辺りを見回してから、すぐさま隅っこに避難をした。

私の後から、アルジュナが入つてくる。すると、訓練場にいる人々は一斉に彼を見て、歓声を上げた。まるで、アイドルのコンサートの

ようだ。幸い、私が入つて来たのを誰も気づいていない。なので、無駄な注目を集めずに済んだのだが……些か、これはひどすぎると思う。もちろん、いい意味で。

人に囲まれている彼はと、につこりと完璧な笑顔で周りに応している。私は表情筋が滅多に働いてくれないので、あんな笑顔を作ることはできない。少し、彼の笑顔は痛々しい感じがするが、きっと周りの人たちはそんな事に気づいていないのだろう。

ボーッと、その光景を見ていると「ポンツ」と誰かに肩を叩かれた。振り向くとそこには、深い智恵を宿した瞳を持つ一人の男がたつていた。妙に人懐こい笑顔を浮かべて私に話し掛けてくる。

「やあ、君は昨日の競技会に来ていた少年だね？」

「はい。そうですけれど……」

「まさか、こんな華奢な体つきをしているとはね。ちゃんと食べてる？」

「食べてますよ。失礼ですね。あなたもドウリーヨダナ様と同じ事を言うのですか——ユディシュティラ様」

「あ、僕のこと知ってるんだ。それにしても、あのドウリーヨダナも僕と同じ事を言っていたのかい」

意外そうに、そう言つて驚く彼——パーンダヴァの長兄、ユディシュティラ。それにコクリと頷けば、珍しいことを聞いたとしてもいうように、目を見開く。

「へえ、そなんだ。で、君の名前は？」

「シャストルラといいます。と、言つてもこれは師から貰つた仮名で

すが

「小刀、ねえ。僕の名前は君が知つているとおり。パーンドウが長

男、ユディシュティラだよ。よろしくね」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

礼儀正しい子だなあ、と感心したように言う彼。いや、全然。全く礼儀正しい子ではないと私は思う。だって、礼儀正しければ、競技会に乱入しないでしょう、普通。なんか、見た目に反してすごいフワフワした人だ。

ざわざわと、彼と話している内にアルジユナの周りにいた人だかりは散っていた。彼は「あ、アルジユナ。こつちだよ」と手招きをして、アルジユナをこちらに呼び寄せる。

「兄上、来ていたのですか」「うん、大分前からね。そう言えば、シャストルラ。彼には挨拶した？」

「いえ、まだです。名乗るのが遅くなりました。師から貰った仮名ですが、シャストルラといいます」

「シャストルラ、ですか。私の名はアルジユナといいます」
よろしくお願ひします。と再度、挨拶をする。ユディシュテイラはそれを、親が子を見守るかのような優しい目で見ていた。

「意外だね。アルジユナが他の人を誘つてここに来るなんて」「……見ていたのですか」

「いや、ここから偶々見えただけだよ」

悪戯っぽく笑うユディシュテイラ。一方、そんな彼を見て、溜め息をつくアルジユナ。こうみると、普通の兄弟にしか見えない。だが、彼らは神の血を持つ半神半人なのだ。

「ところで、シャストルラは何が得意なの？」

「私は剣が得意ですが……昨日、言つてませんでしたつけ」

「ごめん。僕の中での君の印象は『弓での的を破壊した』ということしかなくて……」

「すみません。私の兄上が失礼なことを言つて」

「いや、気にしてないので大丈夫です」

「そうですか。ならいいのですが……」

不安そうに、こちらを見るアルジユナ。何故そんな目でみるのか。私、そんな師匠ほど心狭くないよ。クシャトリヤだからって、理不尽に怒らないから。……多分。

「じゃあ、僕と手合させしようよ」

「えつ。ユディシュテイラ様とですか？」

「様、は付けなくていいよ。言いづらいでしょう？」

「でも、」

「いいから。ね？」

「アツ、ハイ」

「……兄上。貴方という人は」

有無を言わさない圧力だった。アルジユナは兄の言葉に呆れてい
る。ドウリーヨダナはまだ良いとして、彼はあれだ。おおらかな人故
に、無言の圧力が強い。……さすが正法^{ダルマ}の子。

結局、その後。彼と手合させをすることになつたのだが、何故か私
が勝つてしまつた。あれ、私、ただの人間なんだけど。「華奢なのに
……どこからそんな力ができるの……？」地に膝をついて、そう言つて
いる彼。華奢言うな。

「逆に聞きますが、何で私よりも力が弱いんですか」

「僕は頭脳派だから……。自分の非力が憎い」

「（それは、言い訳なのでは……？）でも、あなたも強かつたです」

「本当？」

「嘘は極力言わないようにしているので」

そつかあ、と氣の抜けるような声で言うユデイシユテイラ。アル
ジユナはそんな様子の兄を見て、一言いつた。

「まさかとは思いますが、兄上。貴方、全力を出し切つて負けたという
わけではないですね？」

「確かに……ユデイシユテイラ、あなたは私に手加減をしていました
……よね？」

「えーっと……」

目が凄い勢いで泳いでいるユデイシユテイラ。え？まさかあれが
本気なの？嘘だよね。手加減してたんだ……よね？そうだ。そうだ
と言つてくれ。じゃないと、私が君の弟たちに扱れる。たとえば、目
の前にいるアルジユナとかに。

「だつて、しようがないじゃないか！僕が得意なのは戦車の扱いなん
だし！」

「じゃあ、何で意氣揚々と私と『剣で』手合させをしようと思つたん
ですか？」

「それは……ね。正直に言うと、舐めました。すみませんでした」

「…………」

「…………」

「ふ、一人とも。何で無言で睨むの」

慌てるユディッシュティラ。そんな彼を私とアルジュナは凍えるような冷たい目で見ていた。

「……兄上、仮にも戦クシヤトリヤ士である貴方が相手を舐めてかかるのはどうかと思われますが」

「舐めてた、ねえ？もし、これがただの手合わせでなく殺し合いだとしたら、君は死んでいたかも知れないよ？」

それに、と言葉を続けようとした私たちだが、彼が「もうやめて下さい。お願ひします……」と目尻に涙を溜めながら言つてきたので、仕方なく言うのをやめることにした。

ちなみに、この件があつてからビーマやナクラ、サハデーといったパーンドウ兄弟とかなりの確率で町中で遭遇するようになるのだが……。王族がなんでこうも町を普通に歩いているのか疑問でならない。

それをドウリーヨダナに伝えると、

「お前、厄かなにかが憑いているのか？」
と真顔で言われた。……解せぬ。

3章 王家の華 カリ・ユガの陰謀

競技会があつてから、私は町へ行くことが多くなつていた。といつても、一ヶ月に一回行くか行かないかぐらいの頻度だけれど。普段は森で昔からやつて いるように、鍛練を積んだり、動物たちと過ごしたりしている。

ある日、ラクタパクシヤが珍しく人の姿で私の元にやつて來た。その端正な顔は、不機嫌そうに歪んで いる。またナーガたちと言い争いをしたのだろうか? にしては、やけに静かだ。なにか別の、彼にとつて不快なことがあつたのだろう。

「どうした、なにかあつた?」

「……いや、別に。大したことではない、おまえ御前は氣にするな」

「氣にするな、と言われてもねえ。そんな明らかに“不機嫌です”つて顔をされたら、氣にするよ」

「…………」

私が聞いても、彼は沈黙を保つたままだ。こうなつたら、梃子でも動かない。

「ハア、じやあ言わなくともいいよ。なんとなくだけど、察しがついているし……。どうせ、誰かが厄介事に巻き込まれたんでしょう?」

「!御前は……」

驚いたように、目を見開くラクタパクシヤ。大抵、彼が話さないとときは私に関係がある人物に何かあつたときだ。だからか、とても分かりやすい。じつと、その金の瞳を見つめていると観念したのか、彼はポツリ、ポツリと話しあ始めた。

「……昨夜、ヴァーラナーヴィアタの町外れにある豪邸が炎上しているのを見た」

「最近できた、あの屋敷か。確か“祝福の家”だつけ」

それで?と先を促す。ラクタパクシヤは一瞬、言おうか迷つたのか言葉が詰まつたが、苦虫を潰したような顔をしながら、話してくれた。

「ああ、そうだ。……あそこには、パーンドウ一家が泊まっていた」「えつ、じゃあ」

「えつ、じゃあ」

「落ち着け、パーンドウ一家は無事だ。森から出て、ガンジス河を夜陰に乘じて渡つて いるのを見たからな」

「……そつか。じゃあ、一応生きているんだね」

ホツと息をつく。二週間くらい前に、ヴァーラナーヴアタの町へ王族が見物に行くという話をチラツと聞いたが、まさかパーンドウ一家だとは思わなかつた。そして、ラクタパクシヤが言つていた、燃えた屋敷に宿泊していたということも。……絶対、ドウリーヨダナ辺りが原因だろう。

こないだ行つたとき、不自然なほど上機嫌だつたし。私が「何か良いことがあつたの?」と聞いたら、ニヤリと笑つて「まあな。あつた、と言うよりこれから起ころと言つたほうが正しいが」と物凄い悪人顔で言つていたからなあ。

「それって、ラクタパクシャと私以外に知ってる人はいる？」

「いや、恐らく誰も知らないと思う。町人たちは今頃、パーンドウ一家
が焼け死んだと思い込んでドリタラーシュトラに知らせて いるだろ
うな」

「確かに、バーンドウの母子が死んだとなればドリタラーシュトラ王に知らせるのが一番無難だよね」

きっと、町は大騒ぎになつてゐるだろう。なんせ、自分たちが慕つていたパーンドウ家の者が死んでしまつたのだから。

けれど

私は、高く太陽が昇つた空を見上げる。森はのどかな雰囲気だが、
町は慌ただしい雰囲気に包まれているのだろう。

「そうか……」苦勞だつた

ドリタラーシュトラは知らせをくれた使いの者に、静かにそう言った。側に控えていたビーシュマやドローナたちは、悲しみに声を上げて泣いている。

——パーンドウ一家が、焼け死んだ。

あの、市民や兵たちに慕われていた母子が、死んだ。その悲報は城中を駆けめぐり、ドウリーヨダナとカルナの元にもやつて来た。

「計画は成功したのか」

「ああ、見事成功したさ！まさかこんなにも上手くいくとはな!!」

満面の笑みでカルナに言うドウリーヨダナ。シャストルラの予想通り、今回の事件は彼が仕組んだことだつたらしい。麻と樹脂、そしてその他燃えやすいものをふんだんに使い建てられた屋敷は、彼の思惑通りに昨夜、盛大に燃え上がった。それを知ったドウリーヨダナは今にも躍りだしそうな勢いで、カルナに話し掛ける。

「なあカルナ。お前はどう思う？あのパーンドウ一家が焼け死んだと聞いて」

「……そうだな。オレはあるの一家が簡単に死ぬとは思えない。母親以外皆、半神だからな」

冷静にそう指摘するカルナ。確かに彼らは半人半神だが、ドウリーヨダナはムツとした顔で口を開いた。

「半分神の血が流れていようが、人には変わりないだろう。お前の言うことは一理あるが」

仮に生きていたとしたら、パーンドウ一家は一体どこに消えたのだろうか。そんなことを考えても、答えなど一向に出てこない。ドウリーヨダナは溜め息をつくが、とりあえず、この喜びを友と一緒に噛み締めることにした。

しかし、彼はまだ知らない。

その後に行われる国王ドウルパダによる花婿選びスヴァヤンヴァラで、パーンドウ兄弟が現れ、花嫁のドラウパディーを勝ち取つて行くことを……。

嵐前の静けさ

パーンドウ一家が姿を消してから何ヶ月かたつてから、シャストルラは久々に町に来ていた。というのも、あの騒動があつたあと、一度だけ町の様子を見に行つたのだが、それまであつた活気が嘘のように消えて無くなつていたからである。沈痛な雰囲気が漂う町は、パーンドウ一家が生きていると知つていて、息が詰まるような居心地の悪さを感じさせた。

それ以来、町に行くことはなかつたのだが、ある日たまたま町の近くを散歩していたときにカルナと会つた。彼はどうやら弓の鍛錬をしていたらしく、その手には弓が握られていた。私は、まさかこんなところで会うとは思いもしなかつたので、思わずぎよつとした様子で彼を見てしまつた。一方のカルナといえば、表情こそ変わつてはいなが、何か珍しいものをみたかのように、目を微かに見開かせている。「お久しぶりです。元気にしていましたか？」

「何も変わりはない。お前はどうだ」

「こちらも相変わらずです」

「そうか」

彼の言葉を最後に短い会話が終わる。今更だが、何故か彼と話すとものの数分で会話が途切れてしまう。私はどちらかというと口下手なほうで、普段から話している師匠やラクタパクシャならともかく、こうも久しぶりに会つた人物と話すとき、謎の緊張感に襲われる。例えるのなら、入試で行われる面接。何を聞かれ、何を話さなければならぬのか分からぬために極度に緊張してしまう。そんな感じだ。「えつと、ドウリーヨダナは元気ですか」

苦し紛れに、そう話を切り出す。話題が見つからないので、とりあえず彼の親しい人物について聞いてみるとした。

「ドウリーヨダナか、いつも通りだが最近は浮かれているな。近頃、パンチャーラ国でドウルパダによる花婿選びが催されるらしい。恐らく、それが原因だろう」

「そうなんですか」

花婿選び、かあ。何か面倒事が起きそうなイベントだよね。私は気になつて、具体的な内容をカルナに教えてもらうと、なんとまあ普通の人間には無理ゲーだろうと思つてしまふぐらい、ハードな内容だった。

“誰も引くことのできないと思われる剛弓^{ごうきゆう}を引き、空中高く浮かぶ的を射る”

それさ、絶対半神半人か人間卒業してしまつた聖仙^{リシ}か武人を対象にしているよね。ノーマルな人間はまず無理だよね。そんな内容にしたドゥルパダは一体何を考えているのやら。

「それって、ドウリーヨダナや君は参加しないんですか？」

「参加はする事になつていて。お前は行かないのか？」

「私ですか……うーん、特に興味はないので行くとしたら見学だけですとかね」

それに私、女なんで。と心の中で呟く。カルナは未だに私のことを男と勘違いしてくれているらしく、この話に興味を示さなかつた私をまた、珍しいものをみたかのように目を微かに見開かせて、しげしげと見てきた。

「……ドウリーヨダナは『シャストルラもあんな華奢だが、一応男だからこの話に食い付いてくるだろう』と言つていたが。その予想は見事に外れたようだな」

「え、そんなことを言つていたんですか。あの人」

「ああ。この花婿選びの話題が出たとき、『剛弓を引かせるのだつたら、シャストルラが適任だろうな』と言つていた。ついでに、もし会つたら参加をしてみないか誘つてみてくれとも頼まれた」

「要するに、ドウリーヨダナの代役とかで出て欲しいと。そんなにお嫁さんが欲しいんですか。代役なら、カルナでも良いでしょ？」

細身だけれど、十分に技量はあるんだし。というか、さらつとまたあの悪人は私のことを“華奢”と言いやがつて。ユディシュテイラみたいに、剣でフルボッコにしてあげようか？勿論、ある程度手加減するけれど。

「あの男には、あの男なりの考えがあるのだろう」

「私には、その考えがよく分かりませんが。とりあえず、花嫁選びには

参加しません。観には行きますが」

「承知した。ドウリーヨダナに伝えおこう

「ありがとうございます」

彼に向かって、一つ礼をしてその場で別れた。こんなやり取りがあつたことで、私は今町にいるのだが猛烈に叫びたい衝動に駆られていた。何故なら――

「何で、王族が、護衛も付けずに、町を出歩いているんですか!?」

「おいやめろ。そんなでかい声を出すな。周りに気づかれるだろう」

「ドウリーヨダナ、だから言つただろう」

「護衛なら我が友であるカルナ、お前だけで十分だろう?」

「十分だろう? ジやない!!」

いつの日かのように、王族もといドウリーヨダナがカルナと共に町を歩いていたからである。なんなの、パーンドウ兄弟といいカウラヴァア兄弟といい、王族は一人歩きが好きなの? ドウフシャーサナはともかく、ドウリーヨダナはまだカルナと一緒にいるからマシだけれど。

「まあ、落ち着け。お前と町で会えるとは思つていなかつたからな。おかげで探す手間が省けた」

「私を探していたんですか?」

「この間、お前が言つていたことをドウリーヨダナに伝えたのだが

……」

気まずそうに、私から目を反らすカルナ。……うん、何となく察したよ。どうせ、駄々を捏ねたんだよね『参加してもらいたい』って。何となくだけど、そんな感じがする。

「お前、仮にも男だろう。何で花婿選びに参加しないんだ。剛弓を引くなんて、お前にとつて余裕だらうに」

「君は私のことを何だと思っているんだ。流石に剛弓を引くなんて無理だし、そもそも花嫁とか興味ない」

「興味があるかないかはともかく、やつてみないと分からぬんだろう」「じゃあ、仮に弓を引けたとしよう。相手の花嫁はこんな薄汚いやつ

を婿にしたいと思う？第一、花婿選びだってその花嫁の父親が『自分の娘を自分が気に入つた若者にやりたい』とかいう理由で開かれているようなものでしよう』

「確かにそうだが、いくらなんでも自分の評価が低すぎないか」「確かに低い。普通ですが何か？」

私は真顔で言い切つた。すると、「ああああ！·もう分かつた、分かつたからそんな顔で言うな！」と言つて何故かドウリーヨダナが頭を抱えてしまつた。それを見てカルナは感心したように一言。

「流石だな。あの厚顔な男を言いくるめることができるのは、お前ぐらいだろう」

「別に、誰だつてできると思うのですが……」

不思議に思つて、首を傾げる。彼の湖面のように静かな瞳は、珍しく優しい瞳をしていた。なんというか、親が子を見守るそれに似ている。こんな目もできるんだと彼を見返していると、ドウリーヨダナが「おい」と声を掛けてきた。

「お前が参加しないということは分かつた。でも、スヴァヤンバラ花婿選びは観に来るんだろう？」

「まあ、観には行くね」

「だつたら、俺たちと一緒に行かないか？」

「え、別にラクタパクシヤに送つてもらうから、大丈夫だよ」

「俺たちと一緒に行けば、特等席で観られるが」

えー、どうしよう。別に一緒に行つてもいいけどなあ。流石に初日から行つたら、終わるまで帰れないし。十六日間も戻らないとなると、師匠からOKが出るかどうか……。ラクタパクシヤと一緒にぐんだったら大丈夫だろうか。

「……一応、師匠に聞いてからでもいい？」

「ああ、大丈夫だ。都合がよかつたら当日、町の入口に来てくれ」「了解。気をつけて帰つてね」

「カルナがいるから大丈夫だ」

「お前も、気をつけて帰れ」

「ありがとう。じゃあね」

踵を返して、私は住み慣れた森に帰る。彼らと一緒に行くかは、師匠に許可をもらつてからだな。あと、ラクタパクシャも一緒に行つてくれるだろうし。

「……でも、なんでこんなに嫌な予感しかしないんだろう」

森の帰り道、まだ日が高いはずの林道は薄暗く、生暖かい風が彼女の頬を撫でる。その風に揺れ動く木の葉の影は蛇のように滑らかに地面を滑つていた。

* * * * *

一方、パンチャーラ国にたどり着いたパーンドウ一家は、目立たぬように壺作り人の粗末な家の一隅を借り、バラモンを装つて、毎日托鉢たくはつに出掛け町の様子をそれとなく見回つていた。

「どうやら、明日から花婿選スヴァヤンガアラびが始まるらしいね」

アルジュナと共に托鉢に出掛けているユディシュティラは、周囲の様子を見ながらそう言つた。パンチャーラの都は活気に満ちており、道を行く人びとは明日が楽しみだとでもいうように、張り切つて店の準備などをしている。

「そのようですね。ところで兄上、母上の調子はいかがでしようか」「長旅で相当疲れているようだよ。今はビーマ、ナクラ、サハデーヴアと一緒に休んでいる。特にビーマは僕らをずっと担ぎっぱなしだからねえ、元気そうに見えても、疲れきっているだろう」

沈んだ表情で、ユディシュティラはアルジュナに話す。兄弟の中で一番強靭な肉体を持つビーマは道中、人喰鬼のラークシャサを倒したり、皆が疲れて歩けなくなつたときには全員をその大きな体で担いで、長い距離を歩いてくれたのだ。

「そうですね……早く、安心して暮らせるようになればよいのですが」ユディシュティラの言葉に、アルジュナも頷く。ひとしきり托鉢も終え、皆がいる家に戻ろうとするが、一瞬サッと黒い影が彼らの上を飛んでいった。何だろうと思い、二人は空を見上げるが、そこには雲一つない空と、燐々と輝く太陽があるだけだった。

「今、何か私たちの上を飛んでいきましたか？」

「……うん、何か飛んでいったね。鳥かな？」

不思議そうに、首を傾げるアルジユナとユディシュティラ。彼らの上を飛んでいったものの正体は、シャストルラにお願いされてパンドウ一家の様子を見に来ていたラクタパクシャなのだが、二人はそのことを知るよしもない。

——花婿選びまで、あと僅か。

スヴァヤンガアラ

絢爛なる花婿選び 上

豪華絢爛な装飾に包まれ、芳しい花の香りが一面に漂つているパンチャーラの会場の一角。無事にパラシユラーマからドウリーヨダナたちと一緒に遠出をする許可をもらい、祭の最終日まで残つていたシャストルラは、いつも纏つている外套のフードをよりいつそう深く被り直していた。人が多いせいか、それともこの甘つたるい香りが鼻に付いているせいなのかはよく分からないが、もとから白い肌がよりいつそう白くなり、まるで幽鬼のような青白い顔色になっていた。

「大丈夫か？顔色が随分と悪いが……」

「これが大丈夫に見える？全然、大丈夫じゃない」

「高いところが苦手なのか」

「そういう訳じやないんだ……ただ、この人の多さと無駄に芳しい花の香りがね……」

若干、死んだ魚のような目をしながらカルナにそう答えるシャストルラ。競技会ぐらいの人の多さならまだしも、こんなうじやうじやと蟻のように大勢の人がいる場所は来たことがない。おまけに、何種類かの香水を一気に混ぜたような臭いが漂つている。それが原因で気分が悪くなるのに拍車がかかつてているのだ。

今はカルナと一緒に比較的マシな二階にいるのだが、もうすぐ花嫁ドラウパディーが晴れ姿で現れるので、嫌でも下に降りなければならぬ。一応、ドウリーヨダナとカルナの護衛ということになつていていため、側に控えていなければいけないし、ラクタパクシャは何故か一緒に来てくれなかつたし……。もう本当に、いろいろと辛い。

「無理をしなくても良いとオレは思うが、お前はそれでも行くのだろう」

「当たり前だよ、もし何かあつたら大変だし」

はあ、と深い溜め息をつく。パンチャーラに来る前からそうなのだが、どことなく嫌な予感がする。自分に関することならまだいいが、他の人に関することかもしれないのに、注意をしておいて損をすることはないだろう。それに、気分が悪かろうがなんだろうがどのみち下

に降りなければならぬ。

重い足取りでカルナと共に、一階のドウリーヨダナが座っている場所に歩を進める。その際にすれ違つたバラモンの集団の一人と目が合つたが、それは一瞬のことですぐにフイと目をそらされてしまつた。何処かで見たことがある黒曜石のような、綺麗な瞳だつた。

「…………やつぱり、気のせいかな」

「どうした。もうすぐスヴァヤンヴァラが始まる」

急に歩みを止めたシャストルラを振り返り、急ぐぞと言つて彼女の腕を掴んで人混みを掻き分けていくカルナ。いきなり力強く腕を掴まれたシャストルラはといふと、されるがままに彼に引きずられて連れていかれていく。

「え、ちよ、待つて。わかつたから、そんなに強く引っ張らないで！腕が折れる！」

「すまない。だが、ここで腕を離すと人混みに飲み込まれる」

淡々と、そう返すカルナ。例えシャストルラが人混みに飲み込まれても、彼の黄金に輝く鎧は目立つのではぐれる心配はないのだが、彼女の腕を離すつもりは微塵もないらしい。

そんなやりとりをしている二人をぼろ布を纏つた一人の少年が雑多に紛れてじつと見ていた。先ほど、シャストルラと目が合つたバラモンだ。その漆黒の瞳には驚きと、微かな敵意が浮かんでいる。

「やはり、あの者たちも来ていましたか」

ポツリと、小さく呟く。その言葉はすぐに周りの雜音に掻き消えるが、唯一隣にいた青年だけには聞こえていた。

「どうした。誰か見知った人でもいたの？」

「はい、先ほどカルナとシャストルラが近くに、今はもういませんが」「あー、あの二人ねえ。ということは、ドウリーヨダナもこの場所にいるのか」

うーん、気が滅入るなあと困つたように言う青年。その薄汚れた格好には似合わぬ、どことなく育ちのよさを感じさせる彼は、少し考え込んだのちに開き直るようににつっこりと微笑んだ。

「まあ、なるようになるさ」

のほほんとした様子で、そう言い放った青年。そんな彼を少年はああ、やつぱりかと呆れたような目で見ていた。

* * * * *

目も覚めんばかりのきらびやかな衣装、燐然と輝く宝石、それらで身を飾つた花嫁ドラウパデイーは花婿に供える花輪を黄金の盆に捧げ持ちしづしづと壇上に上がつた。

しんと静まり返つてゐる会場の中央。そこにドラウパデイーの兄、ドリシユタドウユムナが己の最愛の妹の手を壇上から引いて登場し、割れんばかりの大声で宣言をした。

「花婿候補の諸君、見よ、これなる弓矢を！これを使いかの標的を射落されよ。見事的を射た者こそ我が妹を勝ち取り、妻としうるのだ！」更にドリシユタドウユムナは、候補者として名乗り上げた者たちの名を次々と高らかに告げる。ドウリーヨダナをはじめ、ドウフシャー・サナ、ヴィカルナ、ユユツなどカウラヴァ兄弟中の猛者、他にカルナ、シャクニ、ヤーダヴァ族の王など数多くの強者がいた。

「以上の者が、この花婿選び(スヴァヤンガアラ)の参加者である。諸君の健闘を祈ろう」

その言葉を最後に、いよいよ競技が開始された。王族や戦士たちは、勇んで台に乗つた弓を手に取る。しかし、みな歯を喰いしばり、凄い形相で弦を引こうと立ち向かったのだが、結局力尽き、ようよろと地面に座り込んだり、地べたに倒れて暫く起き上がりなくなつてしまつた。

誰も彼も鋼で作られたかのような硬さを誇る弓に翻弄され、衣服は乱れ、無念の叫びを上げる。まるで、敗戦した戦士の靈がこの世に舞い降りてきたかのような散々たる様だった。

（まあ、こうなるよね。元々、只人に引かせるつもりはないんだし）

シャストルラは、静かにこの惨状を見てそう思つた。先ほど席に戻ってきたドウリーヨダナもそうだが、いくら優れた武人であれども、あの頑丈な弓を引くことは敵わなかつたのだ。一体、国王は誰と娘を娶合させたいのだろう？弓を引ける条件がただの人間以上の強

さを持つ人だということが確実なのは目に見えているが。

悶々とシャストルラが思考に耽りはじめたとき、ついに彼女の隣で待機していたカルナが悠然と広場の中央に進み、剛弓を手にした。ゆっくりと弓に矢をつがえ、誰も引けなかつたその鋼の弦を普通の弓弦のように引き絞り、的を射ぬこうとしたのだが――

「あの御者^{スター}を夫にするのは嫌です！彼を夫にするくらいなら、私はずっと独り身でいたほうがましです!!」

突然、ドラウパディーがそう叫んだ。その声を聞いたカルナは微かに苦笑し、ドゥリーヨダナは憤慨する。一方、己の思考に浸っていたシャストルラは、その声ではじめてカルナが中央に行き、弓を引き絞っていたのに気づいた。

「ふざけるな！我が友を侮辱することはたとえ女だろうが許さんぞ」「ドゥリーヨダナ、少し落ち着こうか」

「シャストルラ、お前は何とも思わないのか？誰も引くことのなかつた剛弓を唯一、引き絞つた男がだ。御者だからという理由で拒絶されたんだぞ！これは侮辱という以外の何ものでもないだろう！」

宥めようとしたシャストルラに掴みかかる勢いで、ドゥリーヨダナは怒鳴り散らす。彼女はそれに怯むことなく、ただ静かに彼の目を見据えて口を開いた。

「確かに、君の言うとおりだよ。彼女の――ドラウパディーの言葉は侮辱以外の何ものでもない。」

でもね、と彼女はドゥリーヨダナに言い聞かせるように一旦、言葉に合間を置く。

「彼女には、彼女の気持ちがあるように、君には君の、彼には彼の気持ちがあるでしょう？彼女が彼を夫にしたくないのは身分が低いからというのもあるからだと思うけど、単に彼女がカルナのことを好ましく思つていなかつたからかもしれない」

「…………」

「彼女は彼のことをよく知らないだろうし……けれど、君はカルナのことによく知つていて。良いところも悪いところも含めて。だから、憤りを感じるのはあたりまえのことだと思う」

だんだんと、落ち着いてきたのかドウリーヨダナは静かになつてき
ていた。そんな彼の様子を窺いながら、シャストルラは話続ける。
「まあ、結局私が何を言いたいのかということは、彼女に思うことはあるけ
れど、フラれちゃつた仕方がないということかな。……というのは建
前で、本音を言うとあんな人にカルナを婿にあげるのはもつたないな
い。他にいい人がいると思うから、是非ともそちらをおすすめした
い」

「シャストルラ……お前つてやつは……」

思わず彼女に抱き付いて感動するドウリーヨダナ。そうだよな、
やつぱりそう思うよなと繰り返し呟いている。彼に抱き付かれた
シャストルラはうつ、と少し苦しそうに顔を歪ませて広場の中央にい
るカルナに助けを求めた。

「カルナ……助けて、窒息死しそう」

「ああ、分かつた」

カルナは彼女の言葉にフツと笑い、太陽を一瞬見上げてから、力一
杯引き絞っていた弓を元の台に置き戻し、ドウリーヨダナたちのとこ
ろへ戻つて行つた。

絢爛なる花婿選び 中

「やっぱり、カルナ以外まともに弓を引ける人はいないか……」

「まあ、そりやそうだな。あんな剛弓、引けるやつなんて滅多にいないだろう」

カルナの挑戦が終わつたあと、他の国々の王が挑戦をするも、やはり力及ばず、へなへなど地面に膝をついたり、屈辱に耐えきれずに自分の国へ帰つたり……。シャストルラとドウリーヨダナは、数多くいた花婿候補の強者たちがいつの間にか数を減らしている広場を見て、しみじみとそう話していた。

そんななか、一人のバラモンが観客席からすぐつと立ち上がり、広場の弓に歩み寄る姿が観衆の目に写つた。その凛々しい姿に意氣消沈しはじめていた人々は固唾をのみ、割れるような歓呼の声を上げ、バラモンの長老たちはクシヤトリヤも及ばぬ力業にバラモンが立ち向かうとは大した男だと、拍手喝采して声援を送り、一気に騒がしくなる。

しかし中には、あれほど名高い武人たちでさえ弓を引けずに退散したというのに、細腕のバラモンごときに何ができるのだと馬鹿にする者や、それに対して、バラモンであるパラシユラーマはかつて二十一回もクシヤトリヤを地上から殲滅させたことがあるではないか、もしかしたらあの少年も凄腕の武人かもしれないと言い反論をする者もいて、会場は真つ二つに割れていた。

しかし当の本人は人々の喧騒を気にせず、落ち着き払つた態度で広場の中央に進み出て、弓を持ち上げ矢を手にする。あれほど名だたる武人たちを苦戦させた剛弓は、嘘のようにカルナ同様、彼の手によつて軽々と引き絞られ、次の瞬間目にも止まらぬ早さで矢が飛び出し、的を射落していた。

——カラーン

木の破片が落ちる、軽い音が静まり返つた会場に響く。暫くその音の余韻に浸つていた群衆が割れんばかりの物凄い歓声を上げ、狂喜乱舞はじめた。バラモンは喜び、クシヤトリヤたちは無念の涙を流し

たり、口惜しげに舌打ちをしたりと、さまざまな反応を見せるなか、何百という楽師と聖歌隊は妙なる調べで見事偉業を成し遂げた英雄を讃め称えている。

会場が興奮につつまれてゐる最中、集団に混じつていたとある二人のバラモンが広場をあとにしようと、こつそりと出口に向かつていった。少年もそのあとを追おうと駆け出そうとするが、ドラウパディーがそれを止めて少年に花輪を捧げた。晴れて彼は、彼女の花婿に選ばれたのだ。

それを見たバラモンたちは王と共に敬意を表し、祝福をするが、集まつた王族たちは承知せず口々に怒りをぶちまけていた。

「遙々遠い地から馳せ参じた我々クシャトリヤを無視して、どこの馬とも知れぬバラモンの若僧に娘をくれてやるとは何ごとだ！」

「そうだそうだ！元を言えば、スヴァヤンヴァラはクシャトリヤの行事であつて、バラモンなどが参加する資格はない。これはクシャトリヤ全体に対する侮辱だ！」

激昂した王たちは武器を取り、ドラウパディーの父であるドウルパダ王に向かつて襲いかかろうとする。しかし、咄嗟に少年と二人のバラモンが王の前に立ち、ある者は大木を引き抜いて身構え、ある者は弓を構えて、彼らを返り討ちにしていた。

「おい、シャストルラ。カルナはどこに行つた！」

この騒動を見ていたドウリーヨダナは、ふと己の親しい友が先ほどから姿が見えないことに気付き、声を張り上げてシャストルラに聞く。

「弓を持つていた少年を追いかけてどこかに行つてたけれど！」

「嘘だろ……。ええい、仕方ない。俺はあの大木振り回している奴の方に行つてくるから、お前はカルナを探しに行け！」

どこかげんなりとしているシャストルラが普段は出さないであろう、大きな声でドウリーヨダナに伝えたのだが、それを聞いた彼は、いつの間にか用意していた愛用の棍棒を手にし、意氣揚々とそう告げて乱戦の地に赴こうとしていた。しかし、それをシャストルラは慌てて止める。

「ちよつと待つて、ドウリーヨダナ。あの神話戦争みたいな中に行つてくるの?!」

彼女がそう言つて指差す広間は二人のうち、一人の大柄なバラモンが大木を振り回すことであるでそこに台風があるかのような、凄まじい風が吹き荒れている。彼の回りに群がる王族たちは木の葉の如く軽々と吹き飛ばされており、皆地面に這いつくばつていた。

「ああ、そうだ。何だかあのバラモンを見ていると、ビーマを思い出しちな……何故か一発殴らないといけない気がする」

「そんな理由で?! というか私、カルナを見つけられたとして、戦つたら止められる自信ないんだけれど！」

「お前ならできる……多分な」

「うわあ、凄い不安になる言葉……」

ガクツと肩を落として言うシャストルラ。ドウリーヨダナはそんな彼女の肩にポンと手を乗せて「まあ、精々頑張れよ」と言い残し、サッと乱戦の中に飛び込んで言つてしまつた。

「ええ…………」

ポツンと一人取り残されたシャストルラ。しようがないなあと溜め息をつき、仕方なくカルナを探しに行くことにした。だだつ広い広場をとぼとぼと歩いていると、

——ヒュン

鋭い、何かが風を切る音が聞こえた。それを頬りに向かつていくと、広場の中庭が見えたので、柱からこつそり覗くと——そこにはまたさつきの神話戦争のような闘いが繰り広げられていた。

カルナが矢をつがえ、それを勢いよくバラモンの少年に向かつて放つ。少年はそれを同じく放つた矢で相殺し、相殺しきれなかつた矢は素早く避けて対応し、空きあらばカルナに矢を数本同時に射ち、反撃をする。

よく見ると、二人の回りには矢が落ちており、自分が来るまでの間よくこんな量を撃てたなどシャストルラが思わず引いてしまうほど、大量の矢が散らばり落ちていた。中には壁に突き刺さっているものもある。彼らが放つ矢はまるで隼の如く相手を正確に狙い射つてお

り、シャストルラは到底カルナを止めに入るどころか、二人の間に割つて入ることもできない。

(どうしようかなあ。一人とも戦うこと夢中だし……というか、この中に入つて行きたくない。切実に)

私、ただの人間。と心の中で呟くシャストルラ。しかしドウリーヨダナに頼まれた以上、行かなければならぬ。腹を括り、矢の量が比較的に減つた瞬間を狙つて二人の間に割つて入ろうと決め、ただひたすら、その瞬間が来るのを待つ。

数分たつたのち、カルナと少年が同時に矢を放つた。連続で放つているが、捌ききれない量ではない。今が好機と彼女はその両手に抜き身の片刃刀とその鞘を持つてすかさず二人の間に割つて入り、瞬時に矢を打ち落とし、それを見事防いだ。

「二人とも、弓を下ろして」

シャストルラは無事に二人の間に割つて入れたことに安堵しながら、彼らにそう伝える。急に現れた彼女に驚いたカルナと少年だが、シャストルラの言つた通りに素直に弓を下ろす。しかし、カルナはその顔に戸惑いの表情を浮かべていた。

「シャストルラ……か？」

「そうだけれど……。私以外に誰がいるの」

何故か困惑しているカルナ。それはバラモンの少年も同じようで、小さく「えつ」と言つているのが聞こえた。いきなり止めに入つたことに困惑しているのだろうか？……そういえば、視界が何か明るいような気がする。不思議そうに首を傾げている彼女にカルナと少年はこう言つた。

「……女、だつたのか」

「……女性の方、だつたのですね」

「……え？」

カルナの言葉にバツと反射的に頭に手をやるシャストルラ。被つていたフードがとれており、彼女の素顔が見えている状態になつてゐる。視界が明るかつたのは、日を遮つていたフードがとれていたからか……！それに気づいた彼女は急いでフードを被るが、時すでに遅

し。カルナとバラモンの少年にバツチリ顔を見られてしまっていた。

太陽の光に照らされて輝く、肩より下の長さの透き通った灰銀の髪。アーモンドの眼には青蓮の如く青い瞳が収まり、まだ幼さを残してはいるが、目鼻立ちのよい顔。肌はこの国には珍しい雪のように白い肌であった。一度見たら、忘れることができないであろう彼女の姿はどこか凜とした強さを感じる。

今までフードを被つていたせいで、顔をよく見ておらず声で少年だと判断していた二人だが思い返してみると少年にしては高い声だったと今では分かる。要は少年とも少女ともれる声をしているのだ。（しまつた……まさかフードがはずれるとは思いもしなかった……どうしよう）

（なるほど、花婿選びの話に興味を示さなかつたのはそういうことか）（男性にしては随分と細身だと思つていましたが、まさか女性とは……）

沈黙が、その場を支配する。シャストルラは重い口を開いて、ポツリと一言呟く。

「……君らは何も見なかつた」

その言葉に、今度はカルナと少年が首を傾げる。心なしか、震えているように見える彼女は珍しく声を張り上げて彼らに伝えた。

「だーかーら、君らは何も見なかつた。フードがとれた私の顔なんて見えなかつた！いいね？」

他言無用だと鬼気迫る様子で言う彼女。その目は神もが怖れるような、鋭い眼差しをしている。それを見た二人はコクコクと黙つて頷く。心なしか、顔が青ざめている気がしなくもない。そんな彼らを見てホツとしたような顔をしたシャストルラはカルナに向かつて先に行つているように伝える。

「お前は来ないのか？」

「あとから行くよ。ちょっと、そこの人と話がしたいし」「私ですか？」

「そう、君。だから先に行つて……すぐ行くから」「……ああ、分かつた」

少し心配そうにこちらを見るカルナ。チラリと少年に視線を向けてから、中庭を出ていく。彼の背中が見えなくなるまで、それを見届けたシャストルラはくるりと緊張している少年に向き直つて、呆れたように言う。

「君、変装とか向いてないと思ったことはない？」

「……何のことでしょう。私にはさっぱり分かりません」

涼しい顔をして、フイと顔を背ける少年。努めて冷静に話している彼だが、内心は焦っていた。

（まさか、私の正体に気づいている……？いや、しかしこの私の変装が見破られるはずが……!!）

冷や汗を流しながら、どうすればこの修羅場じたいを切り抜けられるかを必死に考えているが、そんな彼の様子をしげしげと見ていたシャストルラの「うん、やつぱり……」という意味深長な咳きによって、さらになに焦ることになった。

「君、いや……。あなたはパーンドウ家の三男、アルジユナ王子ですね？」

シャストルラは、あえて丁寧な言い方で相手に問いかけた。

「!?……人、違ひではないのでしょうか。私はただのバラモン僧ですよ」

「おもいつきり動搖しているじゃん……」

はあ、と呆れたように溜め息をつくシャストルラ。少年もといアルジユナは必死に平然を取り繕うとしているが、無駄である。彼女はそんな彼に向かつて一言、言葉を口にした。

「元気そうでよかつたよ」

彼女にしては珍しく、その仮面の顔には笑みが浮かんでおり、まるで花の蕾が大輪の花を咲かせたかのようだ。それを見たアルジユナは、豆鉄砲でも食らったかのような顔をして、思わずこう咳いた。

「そういう表情も、できるのですね」

「うん？君が何を言っているのか、私にはさっぱりなんだけど」

突然、突拍子もないことを言つたアルジユナに対してそう答えるシャストルラ。その顔はまたいつものような、無表情に戻つてしまつ

ている。

「とりあえず、君はアルジユナであつてるよね？」

「…………そうです。しかし何故、分かつたのですか？あのカルナでさえ分からなかつたというのに」

「最初、広間で目があつたとき。何か見覚えがある瞳だなあ、と思つて。あと、君の仕草。バラモンにしては動作が綺麗だし、育ちの良さを感じさせたからかな」

「なるほど」

どうやら彼女は、観察力が優れているらしい。そんなことを思ったアルジユナは、シャストルラを少しばかり恐く感じた。もしかしたら、自分の内面を見破つているのではないか。こんな自分を哀れんでいるのではないか。ザワザワと心の中に不安が渦を巻く。

「どうかした？顔色が悪いけれど」

「つ！いえ、大丈夫です。気にしないでください」

ニッコリと笑つて答えるアルジユナ。大丈夫、きっと彼女にも知られていない。自分のこの氣持ちは隠し通さなければならぬのだから。

——たとえ、相手が神であつたとしても。

絢爛なる花婿選び 下

話を終えたアルジユナとシャストルラは、急いで広間に向かついた。自分たちがいない間に、王族たちとの争いが悪化しているかも知れないと思つたからである。

しかし、二人の心配は広間に着いたとき、杞憂だつたことを知る。何故ならば……。

「姫はあのバラモンが見事勝ち得たのだから、潔くそれを認めて、無益な争いは止めようじゃないか。このまま続けるのは、得策だと私は思えないからね」

浅黒い肌に、艶やかな黒髪を纏めているヤーダヴァ族の王、クリシユナが王たちを宥めていたからである。彼の言葉に不承^{ふしよう}不承^{ふしゆう}ながらも武器を納めた王たちは帰国の途についており、口々に自らの不甲斐なさを溢していた。

王たちが完全に去つた広間は群衆たちの歎声が響き、人垣ができつつあつた。人々が寄つてくる前に、カルナ、シャストルラ、ドウリー・ヨダナの三人はサッと迅速に壁際に避難したのだが、アルジユナと他の兄弟と思われる二人のバラモンは避難をする前に、人波に呑まれてしまい、もみくちゃにされている。それを見たクリシユナは愉しそうに笑つており、ドウルパダ王はアワアワと右往左往している。

「……人で、吐きそう」

ボソッと、そう呟いたシャストルラ。その顔は真っ青で、死人のような顔をしている。元々、人混みに慣れていない彼女はあまりの人一年多さに、気分が悪くなつてしまつたのだ。口に手を当てて、何とか耐えているが今にも吐きそうである。

「早くここから離れた方が良さそうだな」

「シャストルラ、耐えろ。ここで吐くなよ」

彼らにはすまないが、自分たちはさつさと退散しよう、とドウリー・ヨダナは彼女の様子を見てそう判断した。心配したカルナが彼女の背中をさすり、「大丈夫か」と声を掛ける。それに対して横に首をふるシャストルラ。なるべく人がいない場所に二人は彼女を誘導し、出口

を目指して歩きはじめた。歩いている間にも、人びとはアルジユナたちがいる広間の中央に押し寄せており、まるで津波のようだ。

シャストルラを気遣いながら人混みを避け、無事に出口に着いた二人だが、そこには、一人の炎の如く燃えるような赤髪と鋭い黄金の瞳をもつた少年が仁王立ちしていた。その精悍な顔立ちは、どこか不機嫌そうである。

「友を迎えたのだが……。この騒ぎはなんだ」

「ラクタ……パク……シャ」

弱々しく、赤髪の少年の名前を呼ぶシャストルラ。名前を呼ばれた彼は、彼女の様子を見て一瞬、目を見開かせるがすぐに元の鋭い眼差しに戻った。

「無事か、と聞きたいところだが……。その様子では無事ではなさそうだな」

仕方がないなど溜め息をつきながら言つた少年はドウリーヨダナたちの方に歩みより、カルナの隣にいたシャストルラを軽々と横抱きにする。抱えられた彼女はと、顔をしかめて「いいよ、……自分で歩けるから」と文句を言つていた。

そんな彼らを暖かい目で見守っているカルナ。一方、カルナとは対照的に、俺たちは何を見せられているのだろうかと若干遠い目をしているドウリーヨダナ。しかし、ふとシャストルラが呼んでいた少年の名前が彼女の友鳥と一緒にすることに気づき、ハツとした様子で言葉を紡いだ。

「ちょっと待て。『ラクタパクシャ』だと？」

ドウリーヨダナは彼女を抱き抱えている少年をまじまじと見た。

大空を掴む巨大な翼や、大地を抉る鋭い鉤爪も、目の前少年にあるはずもなく、どこを見てもただの人間にしか見えない。

その視線に気づいた少年もといラクタパクシャは、片眉を上げて意外だともいうように、ドウリーヨダナの顔を見た。

「己おれが人の姿をとることが出来ると、友から聞いたことがないのか？」

「初耳だ。少なくとも、彼女はオレたちの前で神のことなど話さない」

「確かに、カルナの言うとおりだ。あいつからお前たちに関する話を

聞いたことがない」

ほう、と興味深げに二人の話を聞くラクタパクシャ。なるほど。友が己たちのことを話していないとは、珍しいこともあるのだな。てつくり、話していると思つていたのだが……。疲れきつて、いつのまにか寝てしまつているシャストルラの顔をチラツと見る。

もう少し、二人に話を聞こうと口を開くが。ピリツと彼の肌を刺す気配が近づいてくるのを察した。ヴィシュヌの化身^{アヴァターラ}独特の研ぎ澄まされた剣のような気配。面倒事が起こりそうだと思つたラクタパクシャはその場で話を切り上げ、さつさと自國に帰るよう力ナードウリーヨダナを促した。

「己はシャストルラを連れていくが、御前たちはそのまま自分たちの足で帰つてくれ」

「何故そう急いでいる。何か火急の用でもできたのか？」

「いや、ちょっとな」

カルナの疑問にはつきりとは答えず、そのまま「じゃあな」と言って帰つてしまつたラクタパクシャ。勿論、シャストルラも一緒だ。嵐のように去つていったラクタパクシャを見ながら、その場に取り残された二人はこんなことを思つていた。

（流石、神鳥というべきか。素早い速さで飛び去つていったな）
（そいいや、あいつ。ラクタパクシャは来ないとか言つてしまつたような……。気のせいか？）

遠く空に輝く、炎の煌めきを眺める。やけに長く感じた一日は、もうすぐ終わりを迎へようとしていた。

* * * * *

夕日が照らす黄昏色の空に輝く朱い神秘の翼^{スヴァンヴァラ}が、一等星のように瞬き花婿選びの終幕を神々に知らせている。

そんななか、やつとのことで人垣から脱出することができたアルジュナ、ビーマ、ユーディシュティラの三人はドラウパデイーを連れ家路についていた。

一方、母親のクンティイーは中々帰つてこない息子たちを心配して、気が気ではなかつた。誰かに正体がばれ、それがドウリーヨダナの耳に入り、彼の手にかかるて殺されたのではないか。あるいはラークシヤサに待ち伏せされて酷い目にあつてゐるのではないか。そんな不吉なことが次々と彼女の頭のなかに浮かんでくる。

「こういうときにヴィヤーサがいてくれたら……」

彼らを守つてくれたのに。と呴くが、今ここにいない人物を頼つてもしようがない。落ち着かなければと自分に言い聞かせるクンティーだが、心は乱れており、始終うろうろしていた。

それを見ていたナクラとサハデーヴアは心配して、早く兄たちが帰つてこないかと、しきりに外を眺める。

「母上、ただいま。遅くなつてごめんね？ 素敵なお土産を持つてきましたよ」

そこへ元気よく帰還してきた兄弟のうち、年長者のユディッシュティラが入り口から声を掛けた。その声を聞いたナ克拉とサハデーヴアは飛び出すように彼らを迎えて逝くが、クンティイーは人の氣も知らないで、何を呑気なことを言つてゐるのかと腹をたてて迎えに出もせずに……。

「あら、よかつたわね。お前たちでお分けなさい」と、入り口から声を掛けてしまつた。

それを聞いたビーマは「はつはつはつ」と豪快に笑い、ユディッシュティラとアルジュナは苦笑いをしていた。ビーマの笑い声に何が可笑しいのかと門口に顔を出したクンティイーは、目も醒めるような美しい姫を見て、口をあんぐりとさせ、大きな目を更に大きくした。

ユディッシュティラは微笑みながら己の母親にその日の出来事を話して聞かせる。そして、アルジュナにくるりと体を向けて、こう言った。

「さあ、アルジュナ。この姫は君が勝ち取つたものだ。母上の許しを得て結婚するといい。姫も、姫の父上も喜んで受け入れてくれるだろう

「いや、それはなりません」

アルジユナは顔を強ばらせてユディシュテイラに言う。もしや、一人の姫を分けるはずがないと反論するのかと思ひきや——

「順序として兄上がまず先に結婚するべきです。その次にビーマ、私、次いでナクラ、サハデーヴアというのが正しい在り方でしよう」

至極眞面目な顔で、そう言いきつた。ここは「着眼点はもつと別のところにあるだろう?!」というツツコミをするべきなのだろうが、悲しきかな。アルジユナ以外の兄弟は誰もそのことにツツコミを入れることはなかつた。

「えー……。別に気にしなくてもいいのに、でも、アルジユナがそういうのだつたら、そうだね。」

ユディシュテイラは暫く沈黙し、兄弟の顔を見たのち、決意したようになに、やおら口を開いた。

「僕らみんなの妻にしよう！」

そのとたん、全員の顔がぱつと明かるくなつた。さすがは兄貴と笑つてユディシュテイラの背を叩くビーマ。ナラクとサハデーヴアも喜んで兄様と言つて、彼に向かつて飛び付いている。

——その後、こつそりと後をつけていたクリシュナとバララーマ、そしてドリシュタドウユムナによつて、ドゥルパダ王が己の娘を勝ち取つたのがパーンドウ兄弟と知り、王は喜んでドラウパディーを五人の兄弟の妻とすることを承諾した。

彼らの結婚式は盛大に行われ、それぞれ五人と五日にわたつて結婚式取り行われた。その都度、ドラウパディーは花婿の周りを七度周り、妻となつた。

ドゥルパダはパーンドウ兄弟に十分な財宝、四頭立ての戦車、象百頭、美しく着飾つた侍女たちを与えた。また、ヤーダヴァ族の王クリシュナより、様々な財宝、侍女、象、馬、戦車などが贈られ、ユディシュテイラは喜んでそれらを受け取る。

こうして、パンチャーラの都で楽しい日々を送つたパーンドウ兄弟とドゥルパダ王との盟約は固い基盤の上に築かれることとなつたのだ。